

city&life

都市のしくみと暮らし

no.136

Dec.-Mar.2022-2023



つづくたてもの [PART-1]
—都市・建築・コミュニティー—

特集

巻頭言

建築に時間の流れる

「都市とは、空間への社会の投影である」。マニュエル・カステルのこの言葉を引用しつつ、都市をまず空間と捉えたうえで、その投影が、ヒト、モノ、ココロという三つの領域が越境しながら相互に規定し合うかたちで具体化するというのは、都市社会学の町村敬志氏だ⁽¹⁾。たとえば、都市に生まれた独特の人間関係を媒介にしながら、ココロ=心象風景とモノ=物的関係とが結びつく過程を描き出そうとしたのがいわゆる都市文学であり、その試みは都市の空間への投影を素直なかたちで示したものだといえるのである。

この都市の空間への投影は、ヒト、モノ、ココロという領域の相互作用を通じて、具現化していく。三つの領域は、個別に作用するだけではない。むしろそれらは分かちがたく結びついて、ここから都市を考察するトランスディシプリナリー(領域横断的)なアプローチが生まれる。ヒト、モノ、ココロのそれぞれを二つずつ組み合わせると、三つの複合領域が想定できるが、たとえば、「ヒト-モノ」の結合する領域としては、ただちに建築が思いつく。都市とは、まさに建築物の世界である。もちろん、モノの世界は、建築物だけに限らない。しかし、都市を形成する物理的な構成物という点でいえば、建築物こそ都市そのものだといえるだろう。

ところで、東京を語る時、「変わり続ける」という表現が繰り返し使われてきた。もはや、それはそのまま都市を語るクリシェ(常套句)となっている。しかし、よくよく都市を見てみると、事態はそれほど単純ではないことに気がつく。確かに変わるところは変わっている。しかし、変わらないところは変わらずもとのままだ。むしろ変わるところと変わらないところのまだら模様。そのまだら模様が、より鮮明により明確になっているのが、現代の建築物の世界であり、現代の都市空間なのだ。

現実の都市では、モノの時間だけでなく、ヒトの時間、ココロの時間がそれぞれに流れている。そして、各時間の間には、ズレや軋み、あるいは歪みが生じ、しかも、それは複雑に絡み合いながら、都市の時間をかたちづけている。つづくたてもの、つづく都市。そして、日常というあたりまえの世界。(編集部)

(1)『都市に聴け アーバン・スタディーズから読み解く東京』(有斐閣、2020)



表紙——県営保田窪第一団地、熊本県熊本市
裏表紙—名護市庁舎、沖縄県名護市
photo:坂本政十賜

特集

つづくたてもの [PART-1] —都市・建築・コミュニティー—

contents	対談 この建築の何がいいのか 五十嵐太郎×大西若人	2,27
	ケーススタディ 再訪! 「気になる」建築	
	1. 名護市庁舎 時代の岐路に立つ、地域のシンボルとしての公共建築	5
	2. 県営保田窪第一団地 建築家からの提案としての、「みんなで暮らす」県営団地	8
	3. 大阪ガス実験集合住宅NEXT21 住まいと暮らしの「これから」を考え続ける実験住宅	16
	4. りゅーとびあ 新潟市民芸術文化会館 地域の歴史、文化、自然をつなぐ結節点として	21
	グラビア つづくたてもの 坂本政十賜	9,18,22
	連載 都市の緑3表彰 緑がつかぐ町・人・暮らし② 「グランドメゾン浄水ガーデンシティ」 第33回「緑の環境プラン大賞」の受賞団体決定	30 33
	連載 噂の「駅前」探検⑩ 北千住駅 今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜	34
	back number · information	38

この建築の何がいいのか

建築物は多くの場合、竣工時に注目を集めるが、時を経て、その土地や人との成熟した関係性が築かれた時にこそ、真価が発揮されることもあるだろう。残る建築、使い続けられる建築、いわば「つづくたてもの」とは、何が秀でて、何がいいのだろうか。全国各地の建築を見てこられたお二人に語り合ってください。

photo:坂本政十賜 illustration:河合千明

五十嵐太郎

東北大学大学院教授／建築批評

大西若人

朝日新聞編集委員／建築批評

バブル期の建築再考

五十嵐—コロナで2年半ぐらい海外に行けなかったの、その間地方の建築を精力的に見て回ったんですが、80年代、90年代の、お金のかけられた時代の建築ってやはりすごい。たぶん京都駅ビル⁽¹⁾のような建築はもうつくれないでしょうね。空間のスケール感

がとんでもなく巨大であるにもかかわらず、誰も見ないような細部まで徹底的にデザインされている。そうそう、今回ホテル川久⁽²⁾も見てきましたが、これもあの頃だからできた建築だと思います。

大西—宿泊されたんですか。

五十嵐—ええ。今、ホテル川久は美術館にもなっていて、宿泊客でなくても入館料を払うと収蔵品を鑑賞できるんです。この建築を今の学生はどう評価するんだろうと思いついて見ましたが、たぶん嫌うでしょうね。僕が卒業したのは1990年、まさにバブルの頃。あの当時は卒業設計で巨大なプロジェクトをやるのはあたりまえだったんですが、10年ぐらい前だったかな、卒業設計でおばあちゃんの家のリノベーションをテーマにした学生がい



京都駅ビル

①名称 ②設計者 ③所在地 ④竣工年

(1) ①京都駅ビル ②原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 ③京都府京都市 ④1997年

(2) ①ホテル川久 ②永田祐三 ③和歌山県西牟婁郡白浜町 ④1991年



ホテル川久

て衝撃的でした。時代はすっかり変わりました。

大西—ポリティカルコレクトネスが効いているんでしょうか。たとえば、隈研吾さんのM2⁽³⁾です。竣工時は自動車メーカーのマツダのビルでしたが、全体の意匠とかは、クルマとはまったく関係ないですね。磯崎新さんのつくばセンタービル⁽⁴⁾には中央に広場がありますが、あれはローマのカンピドリオ広場の凹凸をそっくり反転させたものです。ああいうイコノジカルな遊びを建築でやるのが今は許されないという感じなんでしょうね。

五十嵐—つくばセンタービルは映画やテレビによく登場しますよ。

大西—横浜港大さん橋国際客船ターミナル⁽⁵⁾もドラマやプロモーションビデオに好んで使われています。隈さんの水/ガラス⁽⁶⁾も。

五十嵐—コロナの時に、水/ガラスも泊まったんです。ここは客室が4部屋しかないんですが、最上階の海を見渡

せるガラス張りの部屋が有名です。使われていない時間は見学できるので入らせてもらったのですが、もうびっくり。「写真どおりじゃん、これ」みたいな(笑)。

大西—写真ではないけれど、模型と同じだと思ったのは丹下さんの東京都庁舎⁽⁷⁾。建築って模型どおりできるんだなって感心しました。

五十嵐—なんだかんだいって、都庁舎は東京のシンボリックな場としてアニメや映画でよく使われています。とにかく、80年代は強いかたちが好まれましたね。かたちをつくるのが建築だという感じでしたから。

大西—原広司さんのヤマトインターナショナル⁽⁸⁾には驚きました。原さんも田崎美術館⁽⁹⁾ぐらいまでは、ごんまりしていたけれど、あそこから梅田スカイビル⁽¹⁰⁾、京都駅、そして最後は札幌ドーム⁽¹¹⁾。どれもビッグスケールです(笑)。

五十嵐—梅田スカイビルは、コロナ前

(3) ①M2 ②隈研吾建築都市設計事務所 ③東京都世田谷区 ④1990年

(4) ①つくばセンタービル ②磯崎新アトリエ ③茨城県つくば市 ④1983年

(5) ①横浜港大さん橋国際客船ターミナル ②アレハンドロ・ザエロ・ポロ、ファッシド・ムサヴィ ③神奈川県横浜市 ④2002年

(6) ①水/ガラス(現ATAMI海峰楼) ②隈研吾建築都市設計事務所 ③静岡県熱海市 ④1995年

(7) ①東京都庁舎 ②丹下健三 ③東京都新宿区 ④1990年

(8) ①ヤマトインターナショナル ②原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 ③東京都大田区 ④1986年

(9) ①田崎美術館 ②原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 ③長野県北佐久郡軽井沢町 ④1986年

(10) ①梅田スカイビル ②原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 ③大阪府大阪市 ④1993年

(11) ①札幌ドーム ②原広司+アトリエ・ファイ建築研究所 ③北海道札幌市 ④2001年



五十嵐太郎

いがらし・たろう—1967年フランス・パリ生まれ。東北大学大学院工学研究科教授。建築批評家。専攻は建築史。博士(工学)。東京大学工学系大学院建築学専攻修士課程修了。2008年ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展日本館コミッションを務める。著書に『増補版 戦争と建築』(晶文社、2022)、『モダニズム崩壊後の建築:1968年以降の転回と思想』(青土社、2018) 他多数。

までは、海外からの観光客が「あれは面白い」とみんな屋上の空中庭園まで上ってましたね。

大西——あそこは確か夜の10時頃までやっているんですよ。そうすると、USJ(ユニバーサル・スタジオ・ジャパン)が終わった後にギリギリ間に合うから、夜になると夜景が見られることもあって、梅田の駅から、外国人がブワーツとあの斜行エスカレータを上っていくんですよ。しかもネーミングも素晴らしいですよ。屋上庭園だったら面白くないけど、「空中庭園」と言ってしまったわけですから(笑)。

五十嵐——原さんはこまごましたものと巨大なものを両立させる不思議な建築家です。細かい雲のもやもやした形状やフラクタルの複雑な入子構造を装飾に使ったりするけれど、建築自体は巨大スケール。でも、どれも失敗してない。そこがすごい。

大西——日本ではおそらく原さんの建物がボリュームとしては一番大きいんじゃないでしょうか。しかも面白いのは、自邸⁽¹²⁾と設計のボキャブラリーがほとんど同じことです。

五十嵐——そうそう。自邸と京都駅ビルは空間の構成が一緒ですからね。

大西——むしろ将来建てるであろう巨大建築を想定して自邸をつくっていたのかもしれない(笑)。とにかく原さんはどこの文脈にものらない感じの建築家ですよ。

場の力を引き出す建築

五十嵐——もともと老舗の旅館の改修だったはずが、なぜかとんでもない新築になってしまったのがホテル川久。いわゆる80年代建築でいうと、キリンプラザ大阪⁽¹³⁾がすごく好きでした。僕が学生の時に生まれて初めて買ったのが高松伸の作品集で、ちょうどキリンプラザ大阪ができた時でした。彼は戦後生まれの建築家で、しかも商業施設で初めて学会賞を取った。当時、原さんが都市の神殿みたいな感じと評していたけれど、あんなにあっさり壊されてしまうとは(2008年に取り壊された)。

大西——高崎正治さんの結晶のいろ⁽¹⁴⁾も早かったですね、あっという間になくなりました。たぶん2年ほど取り壊されたと思います。

五十嵐——東京国際フォーラム⁽¹⁵⁾もお金をかけただけあって立派な建築です。外国の建築家ラファエル・ヴィニ

オリ設計で、設計料が他より高いってさんざんたたかれましたが、できたものはすごかった。

大西——ガラスの紡錘形の外観もいいんですが、中庭がよくできていますよね。今、たくさんキッチンカーが並んでいます。磯崎さんにはかなり批判されましたね。「東京の五大粗大ゴミ」と言われて。磯崎さんでいうと水戸芸術館⁽¹⁶⁾にはずっと通い続けています。大きい箱、小さい箱と、これまでの美術館にはない形式になっていて、さすが現代美術に通じている磯崎さんらしいところだし、あれをバラバラにして丸の中に入れると金沢21世紀美術館⁽¹⁷⁾になるんじゃないかなと(笑)。

五十嵐——コロナ禍だからこそ行けたのが奈義町現代美術館⁽¹⁸⁾と秋吉台国際芸術村⁽¹⁹⁾。両方ともすごく行きづらいので、見るのを後回しにしていたんですが、奈義はすごくよかったですね。

(p27に続く)



- (12) ①原広司邸 ②原広司 ③東京都町田市 ④1974年
- (13) ①キリンプラザ大阪 ②高松伸建築設計事務所 ③大阪府大阪市 ④1987年(2008年解体)
- (14) ①結晶のいろ ②高崎正治 ③東京都渋谷区 ④1987年(1989年解体)
- (15) ①東京国際フォーラム ②ラファエル・ヴィニオリ ③東京都千代田区 ④1997年
- (16) ①水戸芸術館 ②磯崎新アトリエ ③茨城県水戸市 ④1983年
- (17) ①金沢21世紀美術館 ②SANAA(妹島和世+西沢立衛) ③石川県金沢市 ④2004年
- (18) ①奈義町現代美術館 ②磯崎新アトリエ ③岡山県勝田郡奈義町 ④1994年
- (19) ①秋吉台国際芸術村 ②磯崎新アトリエ ③山口県美祿市 ④1998年

ケーススタディ

再訪! 「気になる」建築

『city&life』誌上で過去に取材、紹介した建物が、竣工からこれまで、数十年に及ぶ年月のなかで、周囲の環境を含めてどのように変わり、あるいは、変わらなかったのか。前回の取材内容を踏まえ、その建物の存在が地域に与えた影響などについて、再訪して検証する。

photo: 坂本政十 賜

1 「名護市庁舎」時代の岐路に立つ、地域のシンボルとしての公共建築

取材・文: 杉山衛



所在地	沖縄県名護市港一丁目1番1号
竣工	1981年4月(1978年公開コンペにて1位選出)
設計	Team ZOO(象設計集団+アトリエ・モビル)
構造	鉄骨鉄筋コンクリート構造、地上3階
延床面積	7351.8㎡
敷地面積	12,201.1㎡

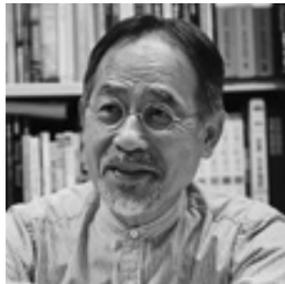
「沖縄」という地域性を結晶させた、新しい建築像

那覇空港からクルマを借りて沖縄自動車道を北上すること約1時間、この高速道の起点とされる許田のインターチェンジを降りて海沿いに名護の市街地に入るとすぐに、目的の「名護市庁舎」がその威容を現した。白とピンクのコンクリートブロックを交互に積み上げて織りなされる特徴的な縞模様は、竣工当初の写真で見るとようなビビッドな発色を失い、灰色がかった色合いに溶け込むように風化している。そこに敷地内に計画的に配されたガジュマルやクワディーサーなどが生い茂り、とくに北

側のテラスにはブーゲンビリアが覆いかぶさるように繁茂することで、まるで亜熱帯の密林のなかで遭遇した、壮麗な古代遺跡のような佇まいを見せている。たえず聞こえる小鳥たちのさえずりが、その雰囲気さをさらに強く印象付ける。

名護市庁舎。沖縄県の建築物のなかでもおそらくもっとも有名なこの建築は、今から41年前の1981年4月、全国から308組が応募したコンペで1位に選ばれたTeam ZOO(象設計集団とアトリエ・モビルの共同体)の設計によって竣工した。それに先立つ1970年には、1町4村が合併し

●3階分が垂直に立ちあがった南側(国道側)のファサード。逆階段型に突き出たコンクリートの台座には、2019年まで56体のシーサー像が並んでいた



●名護市庁舎では長期間現地に滞在し、設計監理を指揮した内田文雄さん。その後独立し、現在は龍環境計画の代表取締役。名護市庁舎竣工後も折をみでは、名護市に足を運んでいるそうだ（龍環境計画オフィスにて）

た名護市が誕生している。新市庁舎はそのシンボル、地域自治の拠点と位置付けられ、78年には審査委員として清家清（委員長）や楨文彦などが参加する、日本国内ではほぼ10年ぶりとなった本格的な建築コンペが開催された。

「沖縄における建築とは何か、市庁舎はどうあるべきか」という問いかけに対して、それを形態として表現し実体化し得る建築家とその案を広く求める、というコンペの要綱に、まずしびれました。とにかく地域の風土や生活をよく見て、地域固有の環境とのつながりのなかに建築のあり方を構想する（発見的方法）を大切に、遮光、

通風、断熱の三つの要素をうまく組み合わせることで建築の全体構成をつくりあげました」と語るのは、1977年から象設計集団に参加し、名護市庁舎では現場の先頭に立って設計監理を指揮した内田文雄さん（現・龍環境計画代表取締役）だ。1971年に創設された象設計集団と沖縄とのつながりは深く、翌72年に沖縄の本土復帰が決まると共に「（沖縄こどもの国）こども博物館」を手がけ、その後も恩納村、名護市、今帰仁村、旧石川市などのまちづくりの基本計画のための調査や提案に携わってきた。沖縄海洋博が開催された1975年には、コンクリートの大屋根と赤く塗られた列柱が印象的な「今帰仁村中央公民館」が竣工している。

それだけに名護市庁舎には、さまざまなかたちで「沖縄」という地域性と新しい公共施設のあり方の提案的表現が見出される。SRC構造、3階建ての庁舎は、海に向かう南側、国道58号に面しては3階分のファサードが垂直に立ちあがった端正な表情をもち、町に隣接する北側は、大きな広場に向けて「アサギテラス」と呼ばれるパーゴラ状の屋根がかかったテラス空間が階段状に積層する開放的な表情をもつ。

本誌「city&life」でも特集「公共建築のデザイン」（25号、1992年）において、竣工約10年後の名護市庁舎を「地域の質感」と題してルポしているが、その大きな特徴として、建物を南北に貫通する約2m角の通風トンネルで南からの涼しい海風を庁舎内に導く、自然空調施設としての「風のミチ」や、蒸し暑さを軽減する建築資材として、戦後沖縄で広く使われるようになったコンクリートブロックの採用などを挙げている。ここに、南側のファサードに並べられた56体のシーサー像を加えても良いだろう。沖縄の家屋に魔除けとして据えられるシーサー像を、すべて異なる作家に依頼してつくったという漆喰の像だ。随所に見られる地域性を色濃く反映した表現は、地方の建築の新しいかたちとして大きな話題を呼び、その年の日本建築学会賞に選ばれてもいる。

時代の要請と共に変わり続ける建築

今回名護市庁舎を訪れて改めて驚かされたのは、その佇まいの自然さだ。建築関係の雑誌や書籍で見ると外観は、恣意的な装飾性を排除してきたモダニズム建築に慣れた目には、いかにも地域性を

強調しましたと言わんばかりの奇抜さが感じられていた。名護市庁舎を「沖縄屈指の珍建築」とする見方も少なくない。けれども那覇空港に降り立ち、沖縄を縦断する道のりを経てくると、それはこの街並みや、ここで営まれる生活と地続きの、ごくあたりまえの表現に思われてくる。

「花ブロック」と呼ばれる、風通しの良い透かしが入ったコンクリートブロックの多用もその一つだ。戦後米軍からもたらされたコンクリートブロックは地域でも製造されるようになり、多彩なデザインの花ブロックを生んだ。「公共建築としては初めて大々的に使った花ブロックや白とピンクの縞模様を構成している柱のコンクリート型枠ブロックは、地元のブロック屋さんと何度も何度も試作を重ねて開発した」と内田さん。市庁舎の竣工後には一般家屋にも型枠ブロックや花ブロックの使用が広まったという。名護市庁舎に感じられる「自然さ」は、およそ10年にわたって地域の調査や交流を重ねてきた象設計集団だからこそ実現できたといえるだろう。地域と切断された建築は次第に廃墟化していくけれども、地域に根ざし地域から立ちあがる建築は、廃墟ではなく「遺跡」になる。そんな

夢想すら起こさせる建築だ。この半ば遺跡化しつつある建築は、しかし現在も立派に市庁舎としての役割を果たし続けている。とりわけ沖縄北部の村々に見られる祭礼場「アサギテラス」をイメージしたという「アサギテラス」は、適度な遮光と通風が得られる独特な構造の庇をもち、職員たちの休憩やちょっとした打ち合わせに活用されている。「当初はここにイスやテーブルを設えて、来庁者との屋外相談所としても使われていました」と、内田さん。いかにも、南国の市庁舎にふさわしい風景が想像される。

このアサギテラスの一部には、当時としては先駆的な、土をしっかりと盛り込んだ植栽もつくり込まれている。その傍らでは、職員の使い勝手に合わせて流し台や洗濯機が設置されたり、紐を張り渡して布巾が干されていたり、鉢植えや、ちょっとしたビオトープのような環境が出現するなど、思い思いの自由な使われ方がなされている。「この内でもあり外でもある空間は「結構良い感じに育てられている」という印象だ。

とはいえこの40年間で、市庁舎の使われ方が大きく変わってきたことも事実だ。名護市の人口の増加や業務の多様化に伴って手狭になったスペースの拡張として、現在建築部などが入る棟が1999年に新設されたこと（今ではさら



上●柱の少ないワンフロアで構成されたオフィス空間。天井に梁のように左右に伸びているのが、自然空調施設としての「風のミチ」（断面は約2m角の大きさ）。現在は使われていないが、稼働時には海側から取り込んだ涼しい風を送り出していた四角い通風口が見える
右●L字型のコンクリートブロックを型枠として使った、特徴的な白とピンクの縞模様の柱。庁舎全体に劣化が進み、ところどころ進入禁止となっている

に庁舎の南側にプレハブ棟が建ち並んでいる）、自然の空調として工夫された「風のミチ」がその役目を終え、2001年にエアコンが全館に設置されたこと、また2019年にはすべてのシーサー像が撤去されたことなどが特筆される。国道側に突き出すように設けられ、ファサードに特徴的な変化を与えていた車椅子用のスロープに、新たにエレベーターが設置されたことにも、時代が建築に求める要件の変化が感じられる。

とりわけ自然空調はコンペの条件にも盛り込まれ、その回答としての「風のミチ」は、「機械空調では味わえない涼しさを感じた」

「室内気温は30度を越えた日がほとんどなかった」と、当初は好評のうちに迎えられていた。しかし2000年に開催された「九州・沖縄サミット」の際に、庁舎近くに設けられたプレスセンターなどで使われた空調施設を貰い受けるかたちで、全面的に機械空調へと切り替えられた。「当時を知る先輩たちからは、通風で書類が飛んでしまったり、にじむ汗で書類が腕にべったりと張り付いたという話を聞いています。それが解消された。また利用者からは、空調が効くようになったおかげで、暑いなかを庁舎へ来てホッとできる、と言われるようになりました」と、庁舎を管理する総務課総務係長の喜納寛さんはその変化を語る。

機械空調が求められた背景には、業務の機械化も大きく影響しているようだ。OA機器が導入されるに従ってそれらが大量の熱を発するようになり、自然空調ではカバーしきれないばかりか、その熱がOA機器に与える悪影響が懸念されるようになった。また「風のミチ」の開口部側の国道の交通量が増すにつれ、風と共に取り込まれるチリも問題になった。このチリもOA機器に影響する。「風のミチ」はそのシステム自体の欠陥というよりも、職場環境の大きな変化によって断念されたといえ

る。OA化に伴ってはその配線スペースの欠如も問題になったが、今では封鎖された「風のミチ」がOA機器の配線に利用されているというのも、なんとも皮肉に感じられる。

建て替えか、保存か、岐路に立つ「名建築」

2019年のシーサー像の全撤去は、名護市庁舎を知る人にとって非常にショッキングな出来事だったが、長年風雨にさらされてきた漆喰の像は劣化を免れず、台風などの強風で破片が落ちるようになったことがその理由だという。その跡が残るコンクリートの台座も寂しいが、現在の市庁舎では、構造体であるコンクリート自体が剥落し始めている点も気になるころだ。名護市庁舎は、外部から直接2・3階のテラスに登れる階段など多様なアプローチができ、北側のテラスから南側の回廊へと、行き止まりのない回遊性が大きな魅力の一つとなっているが、天井の剥落などのために規制線が張られ、通れない場所もできてしまっていた。

「名護市庁舎では、白とピンクのL字型のコンクリートブロックを型枠として使い、それがそのまま仕上げとなる独自の工法を開発しました。当時はそこまで考えが及



上●市街地へとつながる広場に面して「アサギテラス」が階段状に積層する北側のファサード。覆うように茂るブーゲンビリアは10月から4月にかけて花を咲かせ、鮮やかな彩りを添える

右●適度な遮光と風通しを両立させる、独特の構造の庇をもつ「アサギテラス」。見晴らしもよく、職員の休憩や打ち合わせにも使われていた



●市庁舎屋上の植栽とその向こうに広がる名護市の市街地。「珍建築」と思われがちな名護市庁舎も、この風景のなかにしっかりと溶け込んでいる



●取材に際して市庁舎をご案内いただいた名護市総務部 総務課総務係 係長の喜納寛さん

びませんでした、ブロックの中に入れた補強用の鉄筋が錆びて、型枠ブロックを内側から壊しているところも見受けられますし、スラブや梁の打ち放し部に爆裂しているところも見受けられます」と内田さん。喜納さんも、「コンクリートという素材がわずか40年ほどでダメになるとは思わなかった」と驚きつつも、竣工以降ほとんどメンテナンスを行ってこなかった市の体制を反省する。定期的に補修していればコンクリートの剝落はもとより、シーサー像も撤去しないで済んだかもしれない。「当時は今ほどメンテナンスに対する意識は高くありませんでしたが、補修や改修について互いに相談し合うなど、竣工後も施主と建築家が建物の維持管理について情報を交換し合う関係をもち続けることが必要だったと思う」と内田さんは振り返る。

現状、これらのメンテナンスを行うには多額の費用が必要とな

る。名護市ではこうした庁舎の劣化に加えて、庁舎機能が手狭であること、耐震性の問題や、海岸に近い立地が津波などの浸水地域にあたるため、災害に対応する拠点として不適切な点などから、庁舎の建て替え案、もしくは移転新築案が浮上し始めているという。今年6月には「名護市庁舎等更新検討に関する基礎調査業務」として公募型プロポーザルを公告し、その事前調査がスタートしている。「今はまだ何も決まっていますが、この1～2年の間には市民や職員の意見を聞きながら、今後の方針が決められていくことになります。私個人としては愛着もあり保存してほしいのですが、基本的には大きな1スパンでできていて、多くの部署に分けられている庁舎としては、使いにくい間取りがあることも事実です」と、喜納さんは複雑な思いをにじませる。

市庁舎の建て替えや移転計画が浮上した背景には、その立地が、竣工当初とは性格を変えつつあるのも要因の一つであるようだ。当初は工場を誘致しようとして埋め立てられたというこの一帯には、1970年代の象設計集団のマスタープランによって、人工のビーチを始め、体育館、野外ステージ、日本ハムファイターズのキャンプ地ともなっている野球場などの施設を備えた、市民の憩いのための「21世紀の森公園」がつくられ、観光よりも市民生活を優先したま

ちづくりとしても高く評価されてきた。21世紀の森に隣接する市庁舎は、国道から市街地へとつながる町の玄関という位置付けだった。しかしその後山側にバイパスができ、そこに大規模な商業施設ができたことで、少し「まちはずれ」になってしまった感がある。

さらに今名護市では、インバウンドを含む観光客の増加を目指して、名護漁港を中心とする海側の一帯にバスや船の交通ターミナルや観光施設を整備してホテルなどを誘致する、リゾート開発の計画（名護湾沿岸基本構想）も動き始めているという。名護市は観光地として人気の「美ら海水族館」へのルート上にもあり、また今年9月には、名護市と隣の今帰仁村にまたがる山側の敷地に大規模なテーマパークの建設が始まったことも、この再開発計画に拍車をかけることになるだろう。今回の「名護市庁舎等更新検討」調査の対象となっているのは、その再開発地域と21世紀の森のちょうど中間に位置している市庁舎と市民会館だ。「名護湾沿岸基本構想」では「市民と来訪者の交流でにぎわう空間」と位置付けられている。名護市庁舎がこの「遅れてきたリゾート開発」の波に呑み込まれてしまうのか、観光と市民生活が融合する新しい名護市のシンボルとして、用途を変えながらも残り続けるのか、今後の動向が注目される。

2 「県営保田窪第一団地」建築家からの提案としての、「みんなで暮らす」県営団地

取材・文 杉山衛

すべては「県営保田窪第一団地」から始まった

羽田空港から阿蘇くまもと空港への旅客機の航路は、着陸に際して、熊本市街地の上空を比較的低い高度で横切るように飛んでいく。左側の窓際に陣取って見下

ろしていると、その街並みのなかに、ガルバリウム鋼によるヴォールト（緩やかなカーブのかまぼこ型）の屋根が並ぶ中庭型の集合住宅を見つけることができる。中心にあるその中庭は、居住者のためのプライベートな中庭だ。さまざま

所在地	——熊本県熊本市帯山一丁目28
竣工	——1991年8月
設計	——山本理顕
構造	——鉄筋コンクリート造（一部型枠コンクリートブロック壁式造）、地上5階
延床面積	——8,753㎡
敷地面積	——11,184㎡







●住民のプライベート空間である中庭に面して建ち並ぶ住居棟。リビングは中庭に張り出すようにつくられている。スキマのあるヴォールトの屋根も、熱を溜めない工夫だ

まな建物が建ち並ぶ市街地であっても、少し注意していればそれとわかるくらいに特徴的な配置をもつこの集合住宅が、今回の取材で訪れる目的地、「県営保田窪第一団地」だ。

このユニークな県営団地は1991年8月、若手の建築家だった山本理顕さんの提案的な設計により、「くまもとアートポリス(KAP)」の建築の一つとして竣工した。周知のようにアートポリス事業は、当時の熊本県知事で、後に内閣総理大臣(第79代)ともなる細川護熙の主導によって1988年にスタートしている。20年といわれていた建築の建て替え時期の戦後2回目の周期を迎えるにあたり、従来の画一化された街並みへの反省から、アートポリス事業

では、環境デザインに対する県民の意識を高めると共に、後世に残る文化資産としての建築づくりが目指された。実施にあたっては、県が選出したコミッショナーが中心となって、設計者の推薦や選定方法の提案がなされる。初代のコミッショナーは建築家の磯崎新。アートポリス事業は現在も継続され(現コミッショナーは3代目の伊東豊雄)、竣工した建築は104件(2022年11月現在)に及ぶ世界有数の建築プロジェクトとなっている。県営保田窪第一団地はその二つめ、KAPの県営住宅としては最初のプロジェクトとなった。

「後に『住居論』(住まいの図書出版局、1993年初版)としてまとめたように、大学院在籍中から住

宅に関してはいろいろ意見を述べていました。でも実際に手がけるのは初めてで、磯崎さんからチャンスをいただけて嬉しかった。良い建築は都市を活性化する、というKAPのコンセプトにも共感できた。KAPだからこそ、当時考えていた(人が共に住む=集合住宅)への問いかけがそのまま形にできたとし、その後の僕の(住宅)への取り組みは、すべてがここから始まった」と、設計者である山本さんはそう振り返る。



●設計者として保田窪団地のコンセプトを語る山本理顕さん(山本さんが主宰する山本理顕設計工場にて)

保田窪団地はスキャンダラスな、トンデモ建築か？

ところがこの県営保田窪第一団地は、竣工早々大きな物議を醸すことになる。というのもこの集合住宅は県営団地であるにもかかわらず、南向きの四角い住棟が一定間隔で立ち並ぶ、いわゆる団地とはまったく違うのだ。この敷地には戦後すぐに木造の県営住宅が建てられており、竣工後はその住民が優先的に入居したが、彼らがまず、その新居にびっくりしてしまったという。

保田窪団地は熊本の中心市街地から東へバスで30分ほど、最寄り駅のJR水前寺駅からは徒歩20分程度と、比較的便の良い場所に位置している。取材に訪れた日はあいにくの雨模様せいもあってか、外廊下を巡らせたコンクリー

ト5階建ての住居棟の外観に、要塞のような重々しさを感じる。できるだけ外向きの開口部を設けなかったというつくりも、その印象を助長する。上空からも見られたように住居棟は南が開いた台形に配置され、その南側に集会場が置かれることで、中庭をぐるりと囲んでいる。この庭は、団地全体の玄関の役目も果たしている集会場と、それぞれの住居からしか入ることのできない住民のための空間で、県営団地としては前例のないつくりだ。

外部に対して閉鎖性の高い住居は、この庭に面したリビングでは一転して、大きなガラス窓や広いテラスによって開放的につくられている。すべての住居が中庭に向いているので、中庭を挟んで向こう側のリビングの様子が垣間見えちゃう。これも日照の平等性や



左●低層棟の屋上には共有スペースとしてのテラスがつくられている。右手の階段で各住居から広場へと降りることができる
上●東棟3階のリビングからの風景。西と南の2辺に広いテラスが設えられ、窓も大きくて開放感がある。子どもを遊ばせる中庭を見渡すことができるのはもちろん、お向かい(西棟)のリビングまで「ちょっと見えてしまう」



●竣工当初からの入居者で、現在は保田窪団地の自治会長を務めている橋川弘さん

従来のプライバシーを考えると、ありえない位置関係だ。

さらに驚かされるのは、その間取りだ。1階、2階、3階、4・5階とそれぞれ間取りが異なるが、2階以上は廊下側の寝室と中庭に面したりリビングの2棟に分かれ、その間を渡り廊下がつなぐ。「風呂から上がってリビングへ行くためには、外の廊下を通らなければならないことに驚きました。冬は寒いし、時折雨は降り込むしで、当初は苦情がたくさん出ました」と、以前の団地からの移転組で、現在自治会長を務める橋川弘さんは、その衝撃的な出会いを振り返る。そうした住民の声を聞きつけたマスコミが騒ぎ立てたことで、保田窪団地には、あつという間に「トンデモ住宅」のレッテルが貼られてしまったという。

今回の取材ではアートポリス事業を推進する県の建築課の案内で、空き部屋になっている東棟の単身者用の2階と家族向けの3階の間取りを見せていただいた。なるほど、それぞれに4mほどの渡



り廊下がリビングに向かって伸びていて、一度屋外に出る、という印象だ。2階の渡り廊下には、1階部分の屋上が町家建築の坪庭のような露天スペースとなっていて、ちょっとした作業場としても使えそうだ。一方、3階の渡り廊下はまさに「橋」という印象で、グラスファイバーのパネルと通風孔のある金属板で目隠しがされているが、ちょうど通りかかった斜め上(4階)の住民の姿が、グラスファイバー越しにぼんやりと透けて見える。目隠し板から少し背伸びをして見下ろすと、2階の坪庭に面した部屋で机に向かって作業をしている階下の住人の姿も見え、この「ちょっと見えてしまう関係」はかなりの驚きだが、渡り廊下を抜けたリビングは中庭に突き出すようにつくられており、この明るくて開放的なリビングのためだけにでも、ここに住んでみたいと思わせる魅力がある。

「人が集まって住む」ことの意義を考えさせる団地

もちろんこの集合住宅は、決して奇を衒った設計ではない。熊本市街地は内陸的な気候のため、夏場は風が凩いで蒸し暑い日が続く。2棟に分棟してスキマ空間を設けたのは、採光はもちろん、風を取り込むことで蒸し暑さを軽減するための工夫だ。また、比較的收入が低い人や住宅事情に困難を抱える人を対象に、県が国の補助を得て建設・運営する県営住宅には、入居条件を始め、専有面積や

設備の面でさまざまな制約が設けられている。山本さんによれば保田窪団地の建設の頃には、台所の換気扇さえも贅沢な設備として設置することができなかったという。ただし、渡り廊下や坪庭的な露天スペース、リビングにつくられた幅広のテラスは建築法規上では屋外扱いされるため、居住面積にはカウントされない。一見奇矯に見える間取りも、居住者の住み心地を最大限に引き出そうとした苦心の結果だということがわかる。

では、住民のためにつくられた中庭と、そこに面して開放的なリビングが置かれた、向こう三軒両隣のような住居棟の配置はどうだろう。東側の棟には西日が入り、西側の棟は午後には日差しが入らない。あまりにも日照条件が異なるうえ、上下左右のお隣りはもちろんのこと、向かい合う棟からもほの見えるご近所さんの暮らしは、近代生活において最低限必要とされるプライバシーの確保にかなり抵触する印象だ。これに対して山本さんは、「プライバシーの確保や日照の平等性、不特定多数の誰が入ってこられる住棟計画は、居住者を(一住宅=一家族)の中に閉じ込めてきただけで、そこに人々が集まって住むことの、何の回答も提示してこなかった。保田窪団地は、それに対する建築家からの提案として設計した」と



左●日差しと風通しが確保された分棟によるスキマ空間。右手の寝室と左手のリビングは、渡り廊下でつながれている。ここでもお隣の生活が「ちょっと見えてしまう」

上●東棟2階、単身者向け間取りに設けられた坪庭風の露天スペース。右手の屋根のかかった渡り廊下が、奥のリビングへとつながっている

語る。保田窪団地の世帯数は110世帯。これは、敷地面積や建築条件などから導かれたたまたまの数字に過ぎないが、保田窪団地は、たまたま一ところに身を寄せ合っ

て住むことになった人々が、住み暮らすことをとおしてお互いの距離感を測り合える、極めて創造的な生活の場としてつくられているのだ。「誰もが入れられる公共空間では、そこで人はすれ違うだけで、コミュニティの濃密な関係性は生まれません」と言う山本さんは、「公共建築としては贅沢だ」と批判されつつも、住民のための中庭を設えた。そのため、部外者が侵入するとすぐに見咎められてしまう。取材当日も「見知らぬ顔」の私たちへ何人かの居住者が話しかけてくるほど、そのセキュリティはバッチリだ。「不特定の人が入らない中庭は、安心して子どもを遊ばせることができるプライベートな空間として、住民の憩いの場となっています」と橋川さん。とはいえ居住者に招かれれば、誰もがこの中庭に入ることができる。閉鎖性と開放性が融合したこの中庭は、保田窪団地ならではのコミュニティを形成しているようだ。

「県営保田窪第一団地」に住み続けていくために

なかでも面白いのは、中庭に面



●駐車場のある東側から見た保田窪団地の外観。東・西・北棟のそれぞれが外階段をもつ廊下でつながれている。竣工時にはなかったエレベーターは、後年、山本さんの設計により増設された

するテラスで地続きになっている1階だ。このテラスは「自分家」の庭であると共に公共スペースでもある。なので住民は、このくらいまでなら私物を置いて大丈夫だろう、と、まわりを気にしながらも、自分の空間をしっかりと確保している。その測り合いが面白い。「プライバシーの確保や今までにない奇妙な間取りで騒がれたのは最初だけで、住民はすぐにこの環境に慣れてしまったようです」と山本さんが語るように、住民は常に隣人との関係を意識しながらも、意外にすんなりここで暮らすことへのモードに順応していったようだ。なかには渡り廊下に目隠しの覆いを張り巡らせ、完全に外からの視線を遮断している住民もいる。もちろん、それも「あり」だ。

とはいえ現在のこの団地は、設計時に建築家が意図したようには、上手に住まわれていないように思われる。住居者の高齢化や、子育て世帯の減少がその大きな理由の一つではあるが、この団地が、かなり意識的に住まなければ住み

こなせないこともその一因であるに違いない。保田窪団地に人が住み始めた頃には本誌「city&life」でも、特集「新・集合住宅論」(20号、1991年)や「住宅の間取り」(27号、1993年)で山本さんを交えた座談会を企画している。すでに大きく変わり始めていた「家族像」と住宅の関係、そこに建築家が何を提言できるかを語り合っていたのだが、山本さんの保田窪団地の提案には、まったく異なる生活像をもつ人たちに「(共有できる)新たなイメージ」が与えられるかどうか、危ぶむ声も上がっていた。

それでも当初には、中庭で住民たちのお祭りや催しものが開催されてもいた。この団地に興味をもった外部の研究者の主導によってそうした催しが行われたが、その後はぱったりと途絶えてしまった。やはり主導的な役割を果たすキーマンがいなければ、せっかくの提案的共生環境も十分に活用されない。「退去時にもとの状態に戻せばいいので、居住者には自由

に手を入れて、それぞれに住みやすい空間を創造してほしい」と山本さんは言うが、テラスにウッドデッキを張り椅子やテーブルを置くとか、プランターで花を育てるくらいで、個人的な住まい方の工夫だけでは自ずと限界があるのかもしれない。

「1階の間取りは四つ並ぶ部屋を連続させてしまえば、たとえば飲食店や高齢者のためのデイケア施設など、住居とは違った使い方ができるようになっています」と、山本さん。山本さんの著書「脱住宅「小さな経済圏」を設計する」(仲俊治と共著、平凡社、2018年)でも展開されているように、山本さんは当初から居住の集合だけではなく、憩いの場や職場も含めて、そこにいろんな生活の様相が取り込まれるような「地域社会圏」を構想していた。「確かに保田窪団地の外観は今から見ると閉鎖的過ぎたかも知れませんが、1階に外部の人も利用できるようないくつかの施設が入ることで、より多くの人が訪れる一種の町が形成される。その時には中庭もより開放され、地域のコミュニティを形成する(場)としてもっと機能するのではないか。熊本県には今も、そのように提案し続けています」と山本さんは言う。

自治会が組織されているとはいえ、その運営は県が管轄し指定管理者に任されている現状では、字義どおりの「住民自治」はなかなか実現しない。保田窪団地が新しいコミュニティや住民自治を育てるステージとなるためには、運営制度の改革や住民自身の意識改革など、まだまだクリアすべきハードルをいくつか越えていく必要があるだろう。とはいえ、「共に住み暮らす」ことに真正面から向き合ったこの県営保田窪第一団地は、家族のあり方がさらに大きく変化しつつあるなかで、そもそも縁もゆかりもない人たちが集まって暮らすことの意味や可能性に、今もなお刺激的な問題提起となり続けている。

3 「大阪ガス実験集合住宅NEXT21」住まいと暮らしの「これから」を考え続ける実験住宅

取材・文 斎藤夕子

大阪市天王寺区、Osaka Metro谷町六丁目駅から徒歩数分という都市部に建つ「大阪ガス実験集合住宅NEXT21」。「未来を試せる、集合住宅。」をキャッチフレーズとするこの建物は、大阪ガスの職員が実際に居住しながら「環境」「エネルギー」「暮らし」にかかわる、あらゆる実験・検証を行う集合住宅として、1993年10月に竣工した。

『city&life』では、1997年9月発行の45号特集「環境共生型まちづくり」において、「エコロジカル・ハウジングの実験 環境共生住宅地を訪ねて」というルポ記事としてNEXT21の現地取材を実施している。このルポではNEXT21の他、全国各地の環境共生住宅4件の事例を横断的に取材。NEXT21においては、本格的なスケルトン・インフィル構造を採用し、建物の躯体はそのままに、住戸の間取りや設備を改修しながら長く住み継げる「二段階供給方式」であること、環境共生住宅としての建物の緑化、省エネルギー性と環境負荷低減を目指したエネルギーシステムなどを紹介し、「自己完結型システム」をつくりあげた建物だと伝えている。



●1993年10月の竣工からおよそ30年が経つ「大阪ガス実験集合住宅NEXT21」。この間、周辺地域にはマンションも増え、そのボリュームは目立たなくなったが、緑を纏う個性的な外観はやはり目を引く

「自己完結型システム」とは、サステナブルな仕組みをもつということだろう。当時はまだ、サステナブルという言葉は一般的ではなかったが、このことはまさにNEXT21の先進性を表している。

スケルトンの不変性とインフィルの柔軟性

コンクリートのマッシブな躯体に、カラーステンレスの外装。池と小川のあるエコロジカルガーデン、屋上庭園や立体街路（共用廊下）の随所にふんだんに配された植栽に覆われた、地上6階、地下1階の建物は、天王寺区という都市部において異質な存在感を放つ。ただ2000年代、全国的に都市部には高層マンションを中心とする集合住宅が増加しており、天王寺区も例外ではない。NEXT21の向かいの家も、25年前には戸建住宅だったものがマンションに代わった。そういう意味では、周辺地域に対するNEXT21のボリューム感は目立たなくなっているのかもしれない。さらに竣工当時は、日本ではまだ建築物を緑化することは一般的ではなかったが、1990年代末頃からは、主にヒートアイランド

所在地	大阪府大阪市天王寺区清水谷町6-16
竣工	1993年10月
事業者	大阪ガス株式会社
計画・設計	大阪ガスNEXT21建設委員会（内田祥哉、巽和夫、深尾精一、高田光雄、近角真一、高間三郎、速藤彰三、千葉雅弘）
構造	[地下1階～2階] 鉄骨鉄筋コンクリート造 [3階～6階] プレキャストコンクリート+鉄筋コンクリート複合構法
延床面積	4,577㎡
敷地面積	1,543㎡
緑地面積	938㎡

対策として、自治体によっては一定規模の建築物を新築する際には緑化を施すことを義務化する制度が設けられ始めたこともあり、今や、NEXT21ほどの緑比率の多ささほど珍しくはなくなっている。しかし建物そのものの印象は、かつて本誌グラビアに掲載された写真と見比べても、まったく変わ

っていない。古びることなく、変わらぬ姿を保ち続けていることから、この建物が、その運営者や居住者はもちろん、地域や社会とのかかわりを持ち、一定の役割を果たし続けていることがうかがえる。

NEXT21では、1994年に入居を開始して以降、基本的には5



●一部、空中廊下の体裁をもつ「立体街路」は、NEXT21の「立体的なまちとしての集合住宅計画」を象徴する存在。戸建住宅感覚の住戸間をつなく、緑化可能な「道」となっている



上●立体街路の一部、見学用に設備トレンチが見えるようになっている

右●改修中の605住戸。竣工以来、共働きで子どもをもたない夫婦を想定した「DINKS APARTMENT」だったが、40～50代独身者の居住実験向け住戸として改修

年を各住戸の居住実験期間、その後1年は次の実験・検証のための建物の改修期間とし、この間に新たな入居者を募るという6年単位のペースで、第1から第4フェーズまで、フェーズごとに実験テーマを設定してきた。ただ第5フェーズ開始年にあたる2020年からはフェーズごとの区切りを廃止、社会の変化のスピードに合わせて、随時、実験テーマを設定、必要な住戸の改修などを行っていくことに方針を変更している。

「NEXT21のコンセプト自体は、竣工当時から変わっていません。ですが、やっていることはずいぶん変わっています」と教えてくれるのは、大阪ガス株式会社エナジーソリューション事業部の志波徹さんだ。じつは25年前の記事中にも志波さんにお話を伺ったとしてお名前が記載がある。志波さんは初期からNEXT21の管理・運営を始め、数々の実験・検証にも参加しながらあらゆるサポートを行ってきた。

外観である「スケルトン」には、まったく変化は感じられなかったが、「インフィル」である住戸は、竣工時からそのほとんどが改修され、18住戸中、そのまま残っているのは3住戸のみ。そのうちのひとつも、間もなく改修が始まる



いう。ただ、こうした居室の改修よりも大きく変わっているのがエネルギーシステムで、フェーズごとにより大きく変化してきた。25年前の取材で革新的なエネルギーシステムとして紹介したリン酸型燃料電池を用いたコージェネレーションシステムも、現在では各戸に小型燃料電池を設置するようになっている。しかし通常、とくに集合住宅では、電気、ガス、水道などの設備を更新することは容易ではない。だがNEXT21では、住戸の床下には24cmの配管スペース、天井裏にも60cmの設備スペースを確保。さらに立体街路の床下に十分な深さをもつ設備トレンチを設けることで、専用部に大きく触らなくても、設備の更新やメンテナンスを容易に行うことができる。このことにより、住戸の改修においても電気・ガス・水道が集中する水まわりの設計に自由度が与えられ、位置を大幅に変更することも可能だ。ちなみに竣工初期の第1フェーズ中に、こうした構造がどれくらい機能する

のか、一つの住戸でリフォーム実験を行っている。この時は仕事部屋をキッチンに、寝室を浴室にと、水まわりの位置を大きく変更する一つも、間もなく改修が始まる

果、もともと屋外のテラスにあった排水用の縦の樋が内部化されたため、排水音や結露への対応が求められることになったが、改修自体は問題なく行われ、スケルトン・インフィル構造の利点が確認されたという。

「もたれ合い」を許容する住まい

2020年以降はフェーズごとの区切りはなくなったが、同年には「快適な住まい、万に備えた住まい」をテーマに、302・303住戸を一体的に、さらに503住戸の改修が行われ、新たな居住実験がスタートしている。それぞれのテーマは、302・303住戸は「自在の家（住戸）を越える住まい」、503住戸は「ウェルネスZEH風香る舎」。後者のZEHとは「net Zero Energy House」の略で、エネルギー収支をゼロにする家、という意味。503住戸は、究極の省エネルギー性能をもちながら、年間を通じて快適に暮らせる住まいとして設計された。

そして今回は、「自在の家」に2021年に入居した岸本勝好・由佳さんご夫婦に居室内を拝見させてもらうと共に、後日、この設計と共に屋外のテラスを内部化、外壁の位置さえも変更した。この結



●大阪ガス株式会社エナジーソリューション事業部の志波徹さん。1995年4月からNEXT21の運営に携わっているという

うかがうことができた。302・303住戸を一体的に改修した「自在の家」に、何世帯が暮らせるのかを説明するのは少々難しい。現在は、旧302住戸にあたる居住空間に岸本さんご夫婦、旧303住戸を二つに分けた303Westに二人暮らしのご夫婦、303Eastに単身男性という3世帯が暮らしているが、「自在」と称するように、住まい方によっては1世帯、あるいは、もっと多くの世帯が住まうことができるプランになっているからだ。

こうしたプランが完成するまでには、2年ほど前から識者らによるワーキンググループを発足、木下さんもこのメンバーとして議論に参加してきたという。「これからの住まいのあり方としてどういったテーマが考えられるのか、ずいぶん長い時間をかけて議論しました。そのなかで出てきたキーワードが〈分離と結合〉です。家族の住まい方も重要ですが、これからはそれを越えた、血縁関係にない人たちが共同で住む、あるいは一部をシェアするというのもあり得るのではないかと。また、居住者のライフステージに応じて、2住戸が一つになったり、あるいは、もっと分割することもあっていい。この二つのテーマで実験してみることにしました。そのうえで、われわれADHが設計を担当することが決まり、提案したのが、表の立体街路に対して緑地的な役割を果たす〈マエニワ〉と、裏路地的な位置付けになる〈ウチドマ〉という、2住戸を





●「自在の家」の設計にあたった設計組織ADHの渡辺真理さん

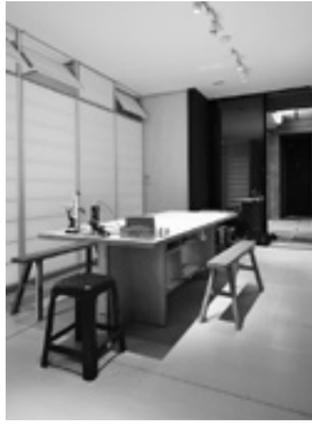
貫通する二つの共有空間をもつプランです」

旧302、303住戸の間には共用廊下と上下階を行き来する階段があり、室外から見れば、一見、完全に隔てられた別の住戸だ。だが、

それぞれの住戸内には「ウチドマ」と位置付けられた空間があり、そこに設えられた引き戸を開け放つと、3世帯が一本の路地のような空間でつながる。また、ウチドマに対して南側にはLDKおよび浴室などの水まわりが配され、さらに、302、303Westではウチドマの北側にハナレと称する居室が設けられている。南側にはプライベートを確保できる居室もあるので、LDKと水まわりを共有スペースと考えれば、北側と南側に別の世帯が暮らすことも可能だ。

プランの構成にあたっては、かつて調査した、オランダやデンマークのコハウジングがヒントになったと、渡辺さんは教えてくれる。「この住宅は、お互いが(もたれ合う)ことができる住まいです。僕は以前、ヨーロッパとアメリカのコハウジングを調査し、取材に行ったのですが、その時にオランダで見た小規模なコハウジングが非常にうまく使われていると感心しました。コハウジングとは、共に夕食を取ることを一つの特徴とする集合住宅のあり方ですが、ここには、たとえば子育て中のシングルマザーや、単身の高齢者など、ある面ではサポートが必要な人たちが緩やかにつながりながら暮らしていた。日本ではコレクティブハウジングがこれに近い住まい方でしょう」

ただ、現在の一般的な集合住宅



左●「自在の家」の302住戸内に設けられた「ウチドマ」。写真右端、引き戸を開け放って共用廊下が見えている状態。その奥に続く303住戸の引き戸も開け放つと一本の路地空間が現れる。左の障子張りの建具の奥は「ハナレ」
右●LDKでくつろぐ岸本さんご夫婦。「個人的な居住空間に刺激されてか、とても意欲的になりました」と勝好さん。とくにクリエイティブティが刺激され、楽器を始めたり、絵本を書き始めたりしているようだ

が、家族や個人のプライバシーを重視するプランを多く採用しているのは、私たち自身がそういう生活を望んだからに他ならない。渡辺さんも、昔ながらの長屋住まいのように、プライバシーが筒抜けの生活に引き戻すことはできないとも捉えている。

「だからこそ、それぞれが自立して住まうこともできるし、必要になった時にはつながることもできる。フレキシブルな使い方ができるのが今回の〈自在の家〉です」

コミュニケーションの新しいかたち

「自在の家」には、あらかじめワーキンググループで検討された住まい方の変化のイメージがある。入居時、15年後、30年後、45年後と、居住者のライフステージによって居室の使い方が変わり、入居時に子育て世代だった家族が、子どもが巣立った後、子ども部屋として利用していたハナレをシェアハウスとして貸し出した、親の介護が必要になった時の居室にしたりする、というイメージだ。

だが現在のところ、二人暮らしのご夫婦2組と単身男性という組み合わせで、いずれも20～30代と若い世代であるため「もたれ合う」必要性はほとんどない。このことから、今回の居住実験では、世帯間の交流を主要テーマとして



おり、入居者募集時にも、親族や友人など、交流可能な3組がセットで応募することが条件になっていた。具体的には、応募の代表者は大阪ガスの社員でもある岸本由佳さんと、303Westに暮らすご夫婦はご主人の勝好さんのご友人夫婦、303Eastに暮らす男性は勝好さんのはとこで、大阪ガスの社員でもあるといった具合だ。

「全員が日中は働いているため、日常的な交流はなかなか難しいのですが、何度か、ウチドマを開け放って、みんなで食事会をしました」と由佳さん。また、ハナレにご友人が宿泊した時には、ウチドマから出入りし、自由にくつろいでくれたそうだ。「自在の家」はこの他、建具の工夫により、風通しの良さや、視線や音の遮蔽・開放も「自在」に制御できるように配慮したプランになっており、この点について勝好さんは「日々実感しています」とその快適性を教えてくれる。

じつは改修前の303住戸は、竣工時に建築家グループのシーラカンスが設計した「自立家族の家」だった。夫婦に子ども2人の4人家族が、それぞれに玄関をもつ個室を経由し、リビングに集うという斬新なプランで、当初から話題を集めていた。いわば「もたれ合う」関係を許容する「自在の家」とは真逆のコンセプトに思える。だが、先に木下さんが「分離と結合」

と言ったように、分離も、結合も、ある意味、自立した個人同士だからこそできる選択だろう。ウチドマという、ウチともソトとも取れる曖昧な空間をシェアしながら、家族だけではない人々が互いに快適に住まうためには、それなりに高度なコミュニケーションが必要になるはずだ。その意味で「自在の家」は、「自立家族の家」という実験を十分に糧としたうえで発展させた、新たなコミュニケーションのあり方を提案し、促す住まいともいえる。

それだけに「自在の家」の真価は、やはり住まい手の暮らしごとのニーズや、ライフステージの変化というソフト面に対し、住まいのハードが柔軟に応え得ることで発揮されるのだろう。現状では、ウチドマを一本につなぐための引き戸は岸本家の勝手口として使われているに過ぎず、共有することを想定してウチドマに面するようにつくられた水まわりも、特段、意味をもってはいない。住まい手のニーズに合った暮らし方を実現するという意味で、このことはまったく否定されることではないが、印象としては「個人的な間取りをもつ快適な住まい」という域を出ない。

もちろん、今期の居住実験終了後は、新たな実験テーマが設定され、それに適した世帯の入居を募集することになり、そのなかで



●302・303住戸の改修に際し、住戸計画検討ワーキンググループにも参加してきた設計組織ADHの木下庸子さん(本誌企画委員)

は、ライフステージに応じた住まい方の変化を検証するための工夫も行われるはずだ。しかし、家族間、あるいは他者を含めたコミュ

ニケーションのあり方を、たとえば、省エネルギー性や環境負荷などのように、数値化して測ることは難しい。ましてや5年という限られた時間のなかで、どれほど把握できるのかには疑問も感じる。NEXT21は「暮らし」も実験・検証の対象としているが、この言葉のなかに含まれるものはあまりに多様だ。「良好な暮らし」と言っても、その答えは一つではない。「実験」には限界もあるだろう。ただ、そうした限界もあえて受け入れ、まだ答えのない課題に挑戦し続けていくNEXT21は、効率の良さや成果ばかりを重視する風潮が高まるばかりの近年、ます

ます貴重な存在であることは間違いない。志波さんは「実験テーマが尽きるまでは、NEXT21の役割はあります」とも語ったが、社会の変化、暮らしの変化はますますスピードを上げている。少なくともこの3年、コロナ禍を経て私たちのライフスタイルは大きく変わった。環境やエネルギーの課題も、より身近なものになっている。NEXT21での実験テーマが尽きることなど、想像もできない。NEXT21から社会へのフィードバックは、これからも、豊かな未来への道標になっていくに違いない。

4 「りゅーとぴあ 新潟市民芸術文化会館」地域の歴史、文化、自然をつなぐ結節点として

取材・文: 村田保子

1998年10月にオープンした新潟市民芸術文化会館、愛称「りゅーとぴあ」は、コンサートホール、劇場、能楽堂の三つの専門ホールを備える文化施設。新潟駅からタクシーで10分ほどの距離で、江戸時代に港町として発展した新潟湊の背後地であり、現在も新潟市の中心市街地の一つになっている古町地区に隣接する場所に

ある。信濃川に架かる昭和大桥を渡ると、屋上庭園をもつガラス張りの建物が姿を現す。

りゅーとぴあが建っている場所は、明治時代に日本で最初に整備された都市公園である白山公園に隣接し、もともとは信濃川を埋め立てた土地でもある。三つのホールを内包する卵型の建物を中心に、駐車場の屋上などを利用した



●空中庭園は全部で六つ。写真の庭園には水盤に浮かぶ舞台が設えられている。最近では空中庭園でマルシェが行われ、この舞台はDJブースとして活用された

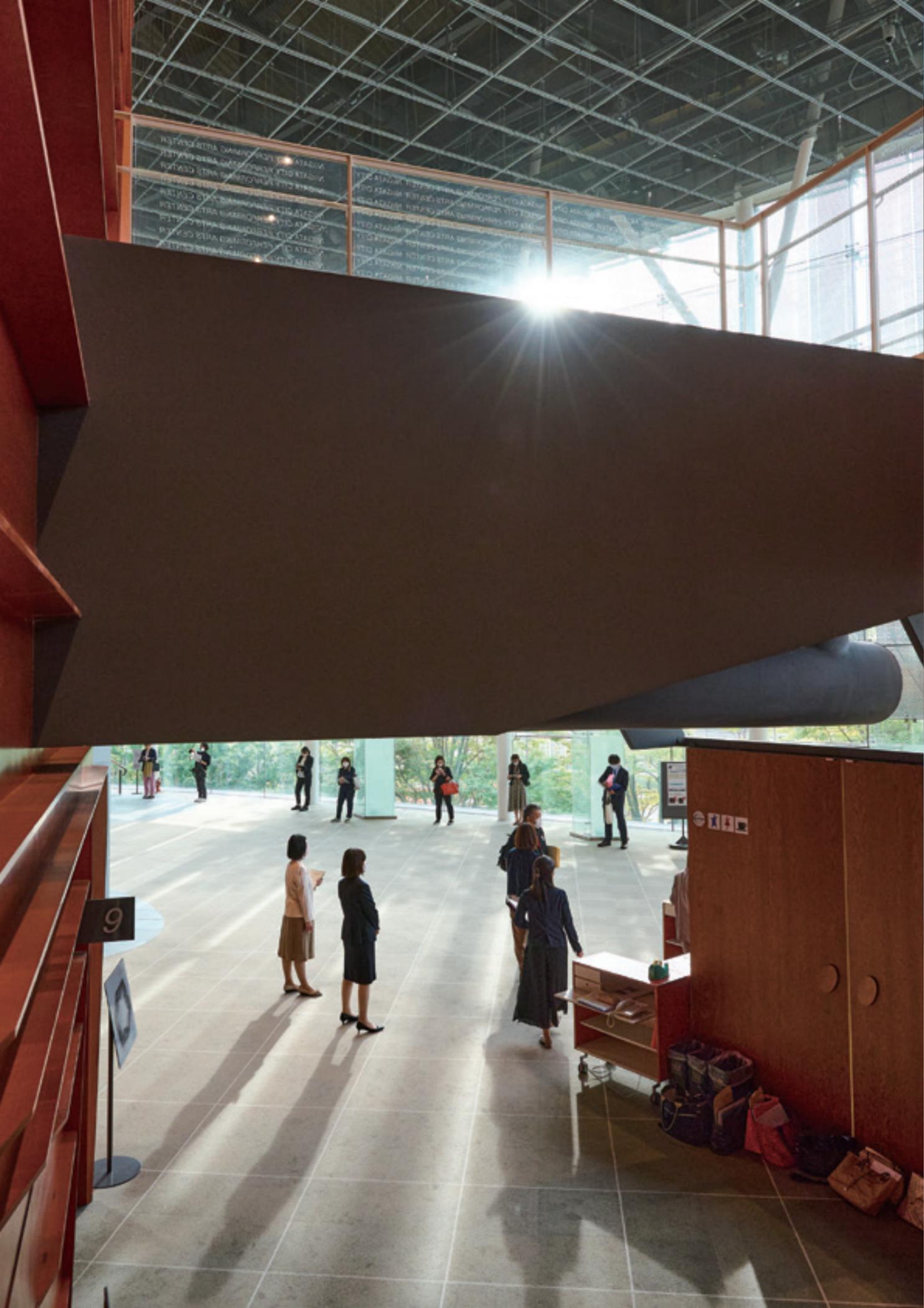
所在地	新潟県新潟市中央区一番堀通町3-2
竣工	1998年6月
設計	長谷川逸子・建築計画工房株式会社
構造	鉄骨鉄筋コンクリート造
延床面積	25,100㎡
敷地面積	11,726㎡

六つの空中庭園がちりばめられ、これらがすべてブリッジや遊歩道でつながり、白山公園から信濃川沿いのやすらぎ堤まで動線を誘導するようにつくられている。近接する新潟県民会館、新潟市音楽文化会館ともブリッジでつながり、豊かに育ったケヤキなどの樹木に囲まれていることもあり、どこまでがりゅーとぴあで、どこからが白山公園なのか、あるいは信濃川の堤なのか、その境界がわからないような印象だ。

若い世代の市民が共有するコンサートホールでの特別な体験

『city&life』では、1999年に「地域のノード、公共施設の新潮流」

(54号)という特集テーマで、りゅーとぴあの設計者である長谷川逸子さん、文化人類学者の竹村真一さん、社会学者の若林幹夫さんとの鼎談を実施。ケーススタディとして現地取材も行った。当時の取材記事では、東京交響楽団と市民で編成された「にいがた東響コーラス」と「新潟市ジュニア合唱団」の共演による合唱の大作「カルミナ・ブラーナ」や、大部分を一般から募集した市民キャストによる舞台「シャンポーの森で眠る」などのオープニング公演の様子から、市民芸術文化会館の名のとおり、市民が舞台の上でイキイキと活躍する様子など、市民参加型の企画を成功させたりゅーとぴあの挑戦に感銘を受けたことを伝えている。





●取材・撮影に協力いただいた公益財団法人新潟市芸術文化振興財団のみなさん。左から、施設運営部 舞台技術課の岡田康之さん、施設運営部 施設・利用課長の石川尚朋さん、事業企画部 演劇企画課長の今尾博之さん

りゅーとびあの市民参加型のオープンニング公演が成功した背景には、設計者の長谷川さんが市民活動の場になることを期待し、運営形態まで含めた設計を提案したことがある。長谷川さんは、設計と並行して何度も新潟に足を運び、地域の地形や歴史、文化などについてのレクチャーを通し、市民との対話を繰り返してきた。施工期間に入ってから、ボランティアや運営者の教育に関するワークショップを月2回のペースで開催し、市民活動の中心となる人材の育成にも取り組んできた。

「りゅーとびあのコンペに出る前から、新潟市にはよく行って、伝統的な家屋や植物などを探して信濃川の上流の方まで歩くことを楽しんでいました。そのなかで、市民の方とお話をすると、クラシック研究会に入っている方がいたり、歌舞伎をやっている方がいたり、とても文化活動が盛んであることがわかり、このような方々の活躍の場になるようにと、自らワークショップのプロデューサーを買って出て、市民の方と一緒にミュージカルやオペラ、歌舞伎などをつくりました」

この市民参加型の自主企画はりゅーとびあの事業の柱となっていたが、その後どう変化し、現在はどうなっているのだろうか。

りゅーとびあは、新潟市の外郭団体である公益財団法人新潟市芸術文化振興財団が運営をしている。音楽、演劇、舞踊の三つの事業企画部署があり、公演の企画制作を手がけている。施設運営部の石川尚朋さんに、変わらず続いて

いる市民参加型の事業について聞いた。

「財団が主催する市民参加型の育成事業としては、ジュニアオーケストラ教室、ジュニア合唱団、ジュニア邦楽合唱団、小学4年生から高校生までの子どもたちの劇団APRICOTがあります。子どもたちの表現力を育み、音楽や演劇の担い手を育てることを目的にしたもので、劇場やコンサートホールでの定期公演を行っています。APRICOT出身で演劇を続けている方が劇場を借りて公演をしたり、子どもの頃にりゅーとびあで初めてパイプオルガンに触れたことをきっかけにプロになった方が、りゅーとびあ専属のオルガニストになったりと、時間の積み重ねによる成果を感じることもあります」と石川さん。

またりゅーとびあのコンサートホールは、毎年新潟市内の小中高校生の合唱の発表会の場としても使われている。取材当日も、新潟市の小学校の教員たちが集まり、発表会へ向けた説明やコンサートホールのツアーなどが行われていた。石川さんによれば、オープンから現在までの24年間に小学生だった新潟市民の多くは、りゅーとびあのコンサートホールの舞台上上がった経験があるという。プライベートで開催した演奏会でコンサートホールの舞台上がって演奏をしたこともあるという石川さんは、その時の感動をこう語る。「音や拍手が上から降ってくる感覚。音響にこだわった音楽専門ホールであることを、身をもって体験し、使用してくれる方にお勧め

する時にも実感がこもるようになりました。私の子どもも含め、若い世代の市民は学校の発表会で、私と同じような感覚を味わい、特別な体験として記憶している方も多いのではないのでしょうか」

市民参加型の事業はアウトリーチへと変化

石川さんが語った現在も継続しているりゅーとびあの育成事業は、本誌が過去に取り上げた市民参加型の自主企画とは、文脈が異なるものだ。長谷川さんと市民によってつくられてきたミュージカルや歌舞伎、オペラなどの市民による公演については、現在ではりゅーとびあの事業としては行われていないという。しかしながら、市民ミュージカルについては、オープンから5年おきに公演を継続し、開館20周年の2018年には、舞台「シャンプーの森で眠る」を再演。その後も、市民による自主的な演劇活動は継続されている。



●約1900席のアリーナ型のコンサートホール。音量感、残響感、広がり感の要素を満たし交響楽に最も適したホールとなっている。正面には最大級のパイプオルガンも

事業企画部として、市民参加型の自主企画に携わってきた今尾博之さんは次のように話してくれた。「市民ミュージカルなどの参加型の事業は、地元の方もたくさん出演され、華々しい盛り上がりをつくります。職員もその盛り上がりと一緒に体験し、またやりたいと意欲を高め、一つの渦をつくってきたことは確かです。しかし、莫大な予算がかかる事業でもあり、参加できるのは一部の市民に限られます。それを同じかたちで続けていくのは難しいことでした。時代の変化に合わせてりゅーとびあの事業も、変革していく必要があります。よりたくさんの方が参加できるワークショップや、りゅーとびあに来たことがない方へのアウトリーチに力を入れることを地道にやっていくことに舵を切り始めています」

オープン当時から、作品のレベルの維持、組織面や興行面での難しさが課題だとされていた市民参



加型の企画にあえて挑戦したりりゅーとびあの試みが、継続していなかったことは残念だ。だが、経済が縮小方向にある時代に、公共の文化施設を維持していくために、予算や人材のリソースの配分を柔軟に変化させ、経済性を維持しながら、よりベストな文化の普及に努めようとする姿勢を感じた。

ただ長谷川さんは、市民参加型のミュージカルなどの事業が姿を変えつつあることに無念さをにじませる。

「現在のりゅーとびあは、音響や舞台に関する専門知識をもった職員が運営を行い、ハイレベルなプロのパフォーマンスを鑑賞する場になっています。2016年から2018年には大規模改修を行い、建物としては耐震補強として天井を全面的に張り替えました。公共施設として20年程度で大規模改修を行うのは、とても早いサイクルです。この時も、多くの予算が音響や照明などの設備の拡充に使われたと私は感じています。私も個人的にコンサートを聴きに行きますが、いつも満席で盛況を極めているのは素晴らしい。その陰で市民の活躍の場ではなく、経済活動の場となってしまったことは残

念で仕方ありません。私が設計した建物が〈小屋〉のような建築であったなら、現在のよう専門性や経営性を高める方向ではなく、市民活動も継続していたのではないかと考えることもあります」

しかし、ハイレベルなプロのパフォーマンスも長谷川さんの尽力があつてこそ、実現しているものである。上質な公演がオープンから現在まで続き、市民を魅了し続けていることもまた事実である。「東京交響楽団」の年6回の定期公演は、多くの固定ファンをもち、通し券を購入する観客も多い。また、2004年に設立したりゅーとびあ専属の舞踊団「Noism」の活動も、世界中から高い評価を受けている。公共劇場が専属のカンパニーを運営するという例は、欧米ではあたりまえに行われているが、日本では現在でもほとんど例がなく、地方都市の文化政策として画期的な取り組みだ。

「機器の老朽劣化を考えると改修は適期であり、大規模改修への投資はりゅーとびあが市民の活躍の場であることの裏付けだと考えています。オープン時に感銘を受けたと評していただいた〈いいがた東響コーラス〉と〈新潟市ジュニ



左●演劇、オペラ、バレエ、舞踊など、さまざまな用途に適合する設備をそなえた劇場。施設運営部 舞台技術課のスタッフが設備を管理している
上●ヒノキ床の舞台、檜皮葺の屋根をもつ能楽堂。舞台正面の鏡板を外すと、中庭の竹林が見え、野外の雰囲気演出できる

ア合唱団)の共演など、財団主催事業として現在も継続している事業もあり、長谷川さんが市民と取り組んできたワークショップなどの成果は今でも活かしていると私は感じています」(石川さん)

今尾さんが話してくれたアウトリーチ事業は、りゅーとびあが今まで積み重ねてきた実績を、空間の外へ持ち出す試みである。「東京交響楽団」や「Noism」が新潟市内の小学校を訪問し、パフォーマンスやレクチャーをすることは、すでに始まっている。今後は演劇についても劇団とのつながりを活かし、まずは新潟市内の小学校へのアウトリーチを増やしていく計画だという。その成果を語るには、これから先、また数十年の時間を積み重ねていくが必要になる。

空中庭園と「渦」の再現が地域に与えた影響

りゅーとびあは建物としても、さまざまな工夫が凝らされている。長谷川さんが打ち出したテーマは、新潟の地形の特徴である「渦」の再現とオープンスペースへの配慮である。この二つの特徴が時間を経て、地域に与えた影響を見ていきたい。

まず「渦」の再現について、時間を経て感じていることを再び長谷川さんに聞いた。

「今でも信濃川のあちこちには浮島群のある渦がたくさん残っています。昔は浮島に幔幕を張って祭りや能、舞踊などを演じ、人々が舟で行き来していたことを、古い資料や写真で見て、この場所の地形ができてきた歴史はとても大事なものと考えました。そこから着想を得て、浮島を空中庭園というかたちで再現しようとしたのです。市民へのレクチャーでもずいぶんとそのことを話し、多くの人に刺激を与えました。りゅーとびあが建った後、2009年に新潟で始まった〈水と土の芸術祭〉では、渦を始めとした新潟の原風景がテーマになったり、渦がメインフィールドになったりして、新潟の風景の歴史を認識するアーティストがたくさん出てきたことは喜ばしいことだったと感じています」

直接的な影響を量化することは難しいが、現代の都市に建築として生まれ変わった「渦」の姿が、新潟市とかかわったアーティストたちに与えたインスピレーションを想像しながら、過去の「水と土の芸術祭」の作品を見直してみるのも面白そうだ。

次にオープンスペースについて、屋上庭園と六つの空中庭園の現在の様子を観察してみた。白山公園や信濃川と一体となった緑豊かなオープンスペースは、公演のない日も犬の散歩やジョギングを



●りゅーとびあの設計を手がけた長谷川逸子さん(長谷川逸子・建築計画工房株式会社のオフィスにて)

する人などがちらほらと見える。さらに詳細に観察すると、白山公園にある白山神社に七五三詣を訪れた親子、写真を撮るカップルなど、老若男女が思い思いにオープンスペースを楽しんでいる。そして、建物に入ると2階のロビーには各種公演のチラシやパンフレットが並び、これを眺めるだけでも旬の演目を感じることができて楽しい。公演のない日もカフェが営業しており、午前中からコーヒーを飲んでくつろぐ人もいる。さらに6階の展望ラウンジは、レストランが入っているが、お弁当を持ち込んで昼休みを取る人や、学校

帰りに勉強をする学生の姿もあった。もちろん、屋上庭園の遊歩道をぐるりと散歩することもできる。近隣の人を除けば、徒歩で立ち寄る立地ではないこともあり、それほど多くの人で賑わっているわけではないが、確かにこの建物には憩いの場として自由に時間を過ごし新潟市民の日常があった。周辺の環境と一体化したオープンスペースからつながる建物、そこに入りエレベーターを経由してたどり着く展望ラウンジや屋上庭園などのしなやかな、時間を経てもなお市民の活動の場として、親しまれ続けているように見えた。

価値を変えることなく大切に建物を管理していく

24年の時を経て、空中庭園周辺ややすらぎ堤に植えた桜が育ち、花見の名所になったことは大きな変化の一つである。人が集まる機会を活かすため、ここ数年、石川さんは花見の季節に合わせて、能楽堂を盛り上げるイベントを開催している。開花時期とイベント開催を合わせるのが難しく

苦戦しているというが、来春も企画を続ける予定だ。また、最近では、屋上庭園にある250カ所以上のフラワーサークルを活かすため、職員が一年を通して常に花が咲くように工夫している。

「来年は25周年を迎えることもあり、りゅーとびあに再び注目してもらえるよいきっかけになればと思っていますが、それもゴールではなく通過点。時代の変化により求められるものが変わるなか、この建物の価値を変えることなく、いつも新鮮な気持ちで使ってもらえるように、管理をしていきたいと仕事に取り組んでいます」と話す石川さん。手すりを付けたり、ベンチを増設したりなど、ちょっとした改修が必要になった時にも、いつも長谷川さんに相談をするという。職員の方々から伝わるこの場所を大切に思う気持ちは、今後もこの建物を守っていくだろう。運営の方針や市民活動の場としての役割は変化したかもしれないが、この建物が市民と地域の歴史や文化とをつなげる結節点であることは変わっていない。



左●2階にあるカフェ「わたしの珈琲店」。公演のない日も営業しているため、朝から食事やお茶を楽しむ人の姿も少なくない

上●2階ロビー。カフェのある東側と、インフォメーションカウンターのある西側をつなぐ通路には、さまざまな公演のポスターやチラシなどがあり、今後の公演の情報を伝える

(p4より続く)

五十嵐—奈義町現代美術館は、傾いたシリンダー状の建物の内側の壁がそのまま龍安寺の石庭になっていて(太陽の部屋(遍在の場・奈義の龍安寺・建築する身体))、若いカップルとか意外に見学客が来ていて、インスタ映えするって言いながらみんな写真撮ってました。秋吉台の方は芸術監督もいなくなり、一時期ぜんぜん使われてなくて、大丈夫かなって思っていたんですが、運営に結婚式の会社が入っていて、ウェディング産業で生き延びているという不思議な状態になっています。余談ですが、奈義町の方は今イタリア政府公認のナポリピザの店が入っていて、それが美味しいと評判らしいですが、いわゆるグルメが吸引力になっているところはけっこうあります。

大西—建物を評価する時に、使い勝手の良さでいい/悪いを判断することがありますが、使い勝手という評価は、おそらく近代以降のことでしょう。

五十嵐—西洋建築史でも日本建築史でもいいんですが、建築史で紹介されている作品で使い勝手がいいということにおいて評価されているものはないと思う。千年単位で残っているような建築物は、結局、空間とかかたちの良さで残っている。社会が変われば、使い方も変わってきますよね。

大西—使い勝手がいい/悪いは別にして、長く使われている建物は当然のことながら手入れもちゃんとしています。金沢21世紀美術館は、使い勝手

でいえば、とてもいいとは思えない。部屋があんなにバラバラだと、展示作業だって大変でしょうね。でもあれだけ人が来て、いつも生き生きしている。展示会の内容や展示だけではなくて、それを超えて何か場の力みたいなのをもっている感じがしますね。

五十嵐—まったく美術館に行かない人って世の中にいっぱいいると思うんですよ。でも、そういう人でもパリに行くと、うっかりルーヴルやポンピドゥーに行っちゃう。でもこれはあくまでも海外でのことで、国内ではそれはないだろうと思っていました。ところが、金沢21世紀美術館はいい意味で裏切ってくれたんです。金沢に行ったら、兼六園を見て、金沢21世紀美術館も見る。普段美術に縁のない人が美術館に行くというルートができた。そういえば、『日経アーキテクチャ』で「平成の10大建築」というアンケートをやった時に、トップが金沢21世紀美術館とせんだいメディアテーク⁽²⁰⁾だった。

大西—SANAAが今年高松宮殿下記念世界文化賞(建築部門)を受けました。その記念講演会では、日本の現代美術館の来館者数は年間5、6万人なので、最初それを超えるようにしてほしいと言われたと明かしていましたが、今、金沢は200万人と聞いています。桁違いですよ。

五十嵐—伊東さんはイン

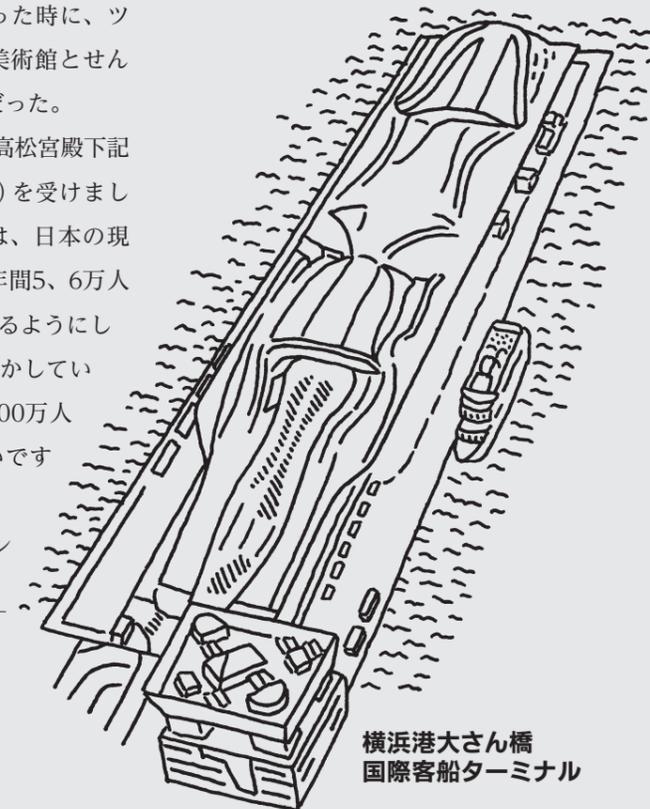
テリアが上手いし、インパクトがありますよね。ぎふメディアコスモス⁽²¹⁾にしても多摩美術大学の図書館⁽²²⁾にしても、内部がいいんです。包まれるような空間体験ができます。

大西—伊東さんは、中から発想している感じですね。胎内というか、からだの中というか。そう思うと、そもそも初期の中野本町の家⁽²³⁾がそうでしたよ。

五十嵐—あれも外より内ですね、確かに。

かわいくって愛着のある建築とは

大西—設計コンペそのものがすごく減りましたよね、今コンペという事業コンペみたいなのが主流です。だからなのか、新しいアイデアが生まれにくくなっている気がします。今年竣工した大阪中之島美術館⁽²⁴⁾は久々に行われた大型の設計コンペだったのではないのでしょうか。



横浜港大さん橋国際客船ターミナル

(20) ①せんだいメディアテーク ②伊東豊雄 ③宮城県仙台市 ④2000年
 (21) ①みんなの森 ぎふメディアコスモス ②伊東豊雄 ③岐阜県岐阜市 ④2015年
 (22) ①多摩美術大学図書館 ②伊東豊雄 ③東京都八王子市 ④2007年
 (23) ①中野本町の家 ②伊東豊雄 ③東京都中野区 ④1976年
 (24) ①大阪中之島美術館 ②遠藤克彦 ③大阪府大阪市 ④2022年



大西若人

おおにし・わかと—1962年京生まれ。朝日新聞編集委員。美術・建築担当。東京大学工学部都市工学科卒業。同修士課程を中退。1987年に朝日新聞社入社。東京本社、大阪本社、西部本社の文化部などを経て2010年より現職。『大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ2000』（越後妻有大地の芸術祭実行委員会、2001）、『リファイン建築へ 建たない時代の建築再利用術 青木茂の全仕事』（建築資料研究社、2001）などに寄稿。

五十嵐—八戸市美術館⁽²⁵⁾は一応コンペだけど、外観は驚くほどそっけない。オープニングのシンポジウムで、地元の人から「ぜんぜん美術館に見えない」という声が上がったほどです。石巻にできた藤本壮介さんのマルホンまきあーとテラス⁽²⁶⁾もすぐれた建築ですが、裏側はまったくデザインしてないんですよ。表もほぼ真っ白の輪郭だけで。80年代、90年代の建築は立体的ですごく気合が入ってましたが、八戸市美術館は正面すら強気の表現をしない感じ。藤本さんの岐阜の多治見モザイクタイルミュージアム⁽²⁷⁾は正面こそキャラクター的な強い顔をもっていますが、裏はデザインなしです。

大西—隈さんのアオーレ長岡⁽²⁸⁾も裏に回ると本当に何もしてない。まあ割り切ったんだと思います。そういう意味では、インスタ映えのようなことが、一つの判断基準になっている可能性もあるのでしょうか。

五十嵐—建築単体で外観やかたちだけで勝負する時代じゃないのかもしれないね。

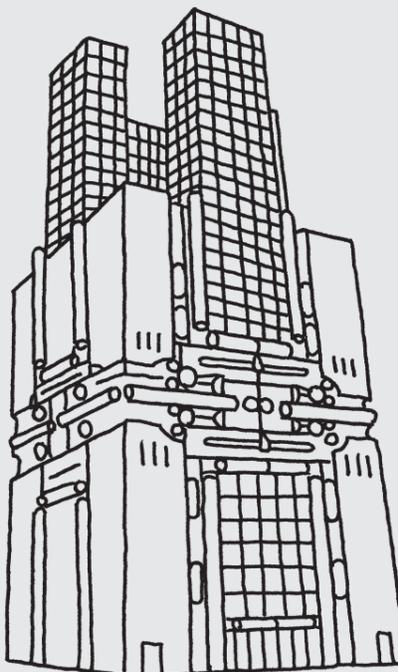
大西—直接関係するかどうかわかりませんが、青森は最初に青森県立美術館⁽²⁹⁾ができて、十和田市現代美術館⁽³⁰⁾ができて、そのあと弘前れんが倉庫美術館⁽³¹⁾と八戸市美術館ができて、急に現代美術の集積地みたいになってきて……。そうすると、青森に行くなら、ついでに見てこようという気

になる。単体ではなくて複数集積すると魅力が増すというのはありますね。五十嵐—周回遅れでトップランナーになったみたいな感じ。しかも2000年になってばたばたと4館が建ち上がった。4館それぞれキャラクターが違うので、それも面白いんですよ。

大西—たとえば、東京から金沢に移転した国立工芸館は新しい建物じゃないんですが、金沢21世紀美術館のおこぼれをもらっているような面があって、正確な数は把握していませんが、少なくとも東京にあった時よりはるかに来館者は多いようです。金沢21世紀美術館に行くついでに寄るという流れができたみたいで、同じようなテーマや同じ建築家のたてものが集まることによるメリットは、確かにあるのかもしれないね。

ところで、プランナーの真壁智治さんは建築を語る際に「カワイイ」を使ってもいいとっています。

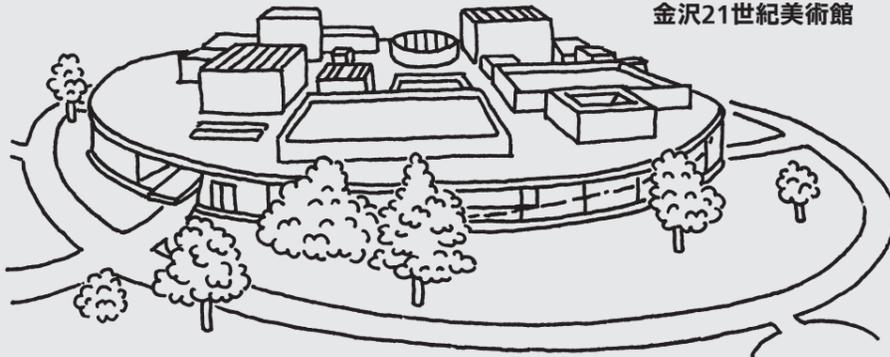
五十嵐—「カワイイ」は建築を使い続けたり、遺したりする際の、重要なポイントだと思っています。ヴェネチア



キリンプラザ大阪

(25) ①八戸市美術館 ②西澤徹夫 ③青森県八戸市 ④2020年
(26) ①マルホンまきあーとテラス ②藤本壮介 ③宮城県石巻市 ④2021年
(27) ①多治見モザイクタイルミュージアム ②藤森照信+エイ・ケイ+エース設計共同体 ③岐阜県多治見市 ④2016年
(28) ①アオーレ長岡 ②隈研吾建築都市設計事務所 ③新潟県長岡市 ④2012年
(29) ①青森県立美術館 ②青木淳 ③青森県青森市 ④2006年
(30) ①十和田市現代美術館 ②西沢立衛 ③青森県十和田市 ④2008年
(31) ①弘前れんが倉庫美術館 ②改修 田根剛 ③青森県弘前市 ④2020年

金沢21世紀美術館



ビエンナーレの日本館のキュレーター、大西麻貴さんが今年シェルターインクルーシブプレイス コパル⁽³²⁾という屋内型の児童遊戯施設を設計しましたが、これなんかまさに「カワイイ」建築だと思います。たとえば、普通、軒先をなるべくシャープに収めるんですが、この建物の軒先はかなり分厚い形状をしています。本人はきのこ、別の人はどらやきと言っていますが、なんともかわいらしく見えるんです。設計と施工、運営者が互いに信頼し合っているというのもいいですね。たとえば、屋根に凹凸があるので、場所によっては雨がザーッと落ちるんです。集中的に水が落ちるのは欠点だと思う人もいますが、ここの運営者は「雨の日に滝が見える場所」と名付けて、建物の欠点を長所と捉える。運営者にこんなふうに理解されて、なんて幸せな建築なんだろうと思いました。シェルターインクルーシブプレイス コパルを見ていると、「カワイイ」とかあるいは「愛される」というキーワードが説得力ある言葉に聞こえてくるんですよ。「カワイイ」や「愛される」は、今後建築を語るうえで、重要なキーワードになると思います。

大西—同じような意味で、「愛着」も大事だと思っています。とくに古い建物を保存・再生する場合「愛着」は非常に重要です。結果的には解体されましたが、西五反田の美智子上皇后のご実家が壊される時に、ものすごい数の人が見に来ていて……。いい住宅建築だとは思いますが、特段名建築として知られているわけではないのに、美智子さまがあそこから嫁いでゆく時の写真をメディアを通じて見ているので、愛着が生まれたんだと思います。門前仲町に食糧ビルディング⁽³³⁾という建物があって、アートの活動があったり、ドラマのロケにもよく使われたりしていて、壊す時に長蛇の列だったんですよ。建築のプロの評価とはまた別の、評価軸が必要なのかもしれません。五十嵐—この前、宮城県立美術館⁽³⁴⁾の移転構想が発表されたんですが、大勢の市民が移転反対に立ち上がり、最終的には撤回されて、建物は残って使い続けることになったんです。この建築に愛着をもつ人たちがこんなにたくさんいたなんて、正直驚きました。「カワイイ」と「愛着」をキーワードに、建物のこれからを考えてみるのも面白そうですね。

(32) ①シェルターインクルーシブプレイス コパル ②大西麻貴+百田有希/o+h ③山形県山形市 ④2022年
(33) ①食糧ビルディング ②渡辺虎一 ③東京都江東区 ④1927年(2002年解体)
(34) ①宮城県立美術館 ②前川國男 ③宮城県仙台市 ④1981年

緑がつなぐ町・人・暮らし

一般財団法人第一生命財団では、公益財団法人都市緑化機構と共に、「緑の環境プラン大賞」(共催)、「緑の都市賞」「屋上・壁面緑化技術コンクール」(いずれも特別協賛)の、「都市の緑3表彰」に取り組んでいる。これらは、都市緑化を通じ、環境保全、ヒートアイランドの抑止、二酸化炭素の削減、緑のまちづくりや植栽活動を通じたコミュニティの形成などに貢献する事業を支援、顕彰するもので、全国各地で、すでに多くの取り組みが実績をあげている。これらに選出された事業のなかから、とくに都市環境の向上やまちづくりに資する事例を取材し、緑を通じたまちづくりを紹介していく。

取材・文:斎藤夕子 photo:坂本政十郎

「グランドメゾン浄水ガーデンシティ」

緑の都市賞 国土交通大臣賞:緑の事業活動部門

福岡県福岡市、「天神ビックバン」と称する大規模再開発が進む福岡市の中心市街地、天神エリアから約1.5kmの距離に位置する「グランドメゾン浄水ガーデンシティ」。積水ハウス株式会社が展開する分譲マンションシリーズの一つとして2013年に整備がスタート。全体で約3.5haに及ぶ広大な敷地内には、第1期として2015年に竣工した「サウスフォレスト」、第2期として2019年に竣工した「フォレストゲートⅠ・Ⅱ・Ⅲ」3棟が、それぞれ分棟形式で配され、現在、第3期として「セントラルフォレストⅠ・Ⅱ」2棟が2023年竣工予定(Ⅰは2022年竣工)で建設中だ。住戸数は全体でおよそ670戸に及ぶという、大規模な集合住宅群である。

地域に開かれた緑の空間

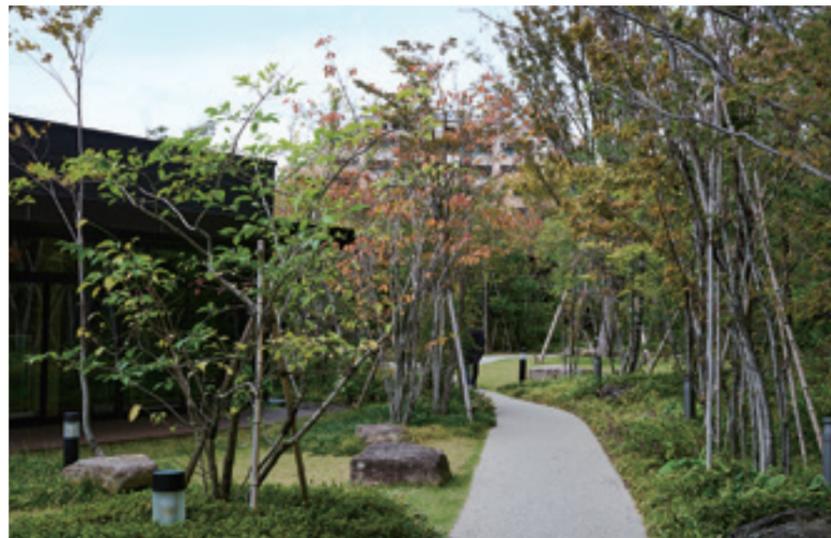
「浄水」の名称は、敷地が接道する「浄水通り」に由来するが、もともとはこの地域に、1923年に開設された「平尾浄水場」があったからだ。浄水場は1970年代に廃止されたが、その跡地

は浄水緑地や、福岡市動植物園を有する南公園として整備され、市民の憩いの場となっている。また、敷地内で最後の工事が行われているセントラルフォレストのエリアは、2019年に閉館するまで、福岡市立九電記念体育館があった場所で、同体育館は1964年の竣工以降、一時は大相撲の九州場所に利用されたり、国内外の有名ミュージシャンのコンサート会場になるなど、広く市民に親しまれてきた。

そうした背景をもつこの土地で、新たな住宅開発を行うにあたっては、こ

こに暮らし、訪れる人々が、豊かな自然環境のなかで交流を育めるようなまちづくりを行うことがコンセプトとなった。2013年、敷地の南側に位置する「サウスフォレスト」の建設に着手すると同時に、一帯を「浄水の森」と位置付け、浄水緑地と連動する植栽計画を構想。敷地全体の約3分の1にあたる、1.1haを緑地とし、これを2023年までの10年をかけて育成。緑化を通じて、生態系の再生と地域住民との交流活性化を目指してきた。

「都心部でありながら十分な広さがあ



●ゆったりとした敷地に、さまざまな樹種が厚みのある緑の空間をつくる「グランドメゾン浄水ガーデンシティ」



左●小学校や高校のある敷地の東側から住棟群をのぞむ。緑に覆われた散策路「フットパス」は、子どもたちの通学路としても使われている
上●フットパスを蛇行させることで、緑の奥行きが演出されている

り、緑を生かせる恵まれた敷地でした。そこで近隣の浄水緑地や動植物園との連動性を意識した緑の回廊を構成し、生態系の中継点として自然環境の再生に貢献できるように、さらに、居住者はもちろん、周辺地域の方々にも公園のように利用していただけるような、都市の森づくりを進めています」

そう教えてくれるのは、積水ハウス株式会社福岡マンション事業部の鈴木詠美さんだ。

確かに、鈴木さんが言うように、浄水通りから同敷地内へは、公園を訪ねるような気軽さで足を踏み入れることができる。そのポイントとなっているのが、浄水通りに面して大きく開かれたテラス席をもつカフェが入居した、「JOSUI TERRACE」と称する商業施設の存在だ。この施設は、敷地を隔てるゲートの役割も果たしているのだが、誰もが利用できる商業施設があることで、そこから奥へ続く緑豊かな散策路へと、アクセスしやすい雰囲気がつくられている。実際、「フットパス」と称するこの散策路は、誰でも通行可能で、敷地裏手の小学校や高校に通う

子どもたちの通学路として、また、地域の人々の散歩道としても使われているという。また、フットパスを歩いても、マンションの敷地だという気配は希薄で、居住者も地域の人も気兼ねなく、緑に覆われた環境を満喫できる。こうした心地よさは、住棟の配置を工夫したことで創出されているようだ。

「住棟を浄水通りに対して平行ではなく、南北軸に配したことで、通りから住棟までの奥行きができ、その分、緑地が十分に確保されています。これに

より、高木を含む多くの樹木を植栽することが可能になり、いっそう充実した緑の空間をつくることができました。また住棟間にもほどよい距離をとって緑化しているので、居住者にとっても、緑が目隠しになると共に、室内に居ながらにして屋外の自然を感じられる、風通しの良い居住空間が実現しました」

さらに鈴木さんによれば、マンションは通常、高層階の人気の高いが、このグランドメゾン浄水ガーデンシティでは、樹々の緑がより身近に感じられ



●敷地の中央部に位置する「浄水の丘」。人工地盤上に軽量土壌を用い、浄水緑地とのつながりを意識した緩やかな丘陵として整備。人工地盤の下は駐輪場となっている



上●浄水通りに面し、敷地とのゲートの役割も担う商業施設「JOSUI TERRACE」。テラス席のあるカフェは地域の人々で賑わう
左●「JOSUI TERRACE」から敷地内へと続くフットパス

る低層階の人気が高いそうだ。

四季を感じる「自然循環の森」

緑化にあたっては、既存樹としてあったケヤキやツツジも生かしながら、敷地周辺の潜在自然植生である「ヤブツバキクラス域」「ミミズバイ-スダジイ群集」に属する在来種を意識して植樹しているという。具体的には、浄水通りに面した沿道にはケヤキ、シラカシ、シロダモなど中高木のボリュームある緑を植えて街路樹に。住棟内庭の南側には、春から初夏に花をつけるガマズミ、ヤマボウシ、シラカシなど。同じく住棟内庭でも陰になりやすいエリアには、ヤマツツジ、イロハモミジなどの紅葉を楽しめる樹種を。またフ

ットパスの周辺には、季節の彩りを与えるヤマザクラやコブシを植栽。敷地全体を通じて、四季折々の自然の移ろいを感じられる構成となっている。さらに、地域の自然の森を手本にした配植密度とすることで、新たな幼木が成長していく「自然循環の森」となるよう、配慮しているという。

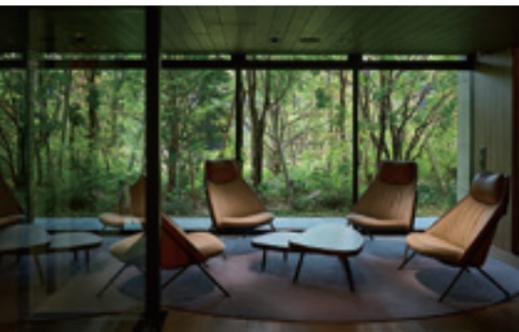
一方で、地域住民らとの交流については、計画どおりには進んでいないと鈴木さんは言う。

「居住者や地域の方々との、緑を通じたワークショップや、ハロウィン、クリスマスなどの季節のイベント開催を想定していたのですが、コロナ禍により、現在のところ大々的には開催できていません。ただ、フットパスでの散

策を通じ、地域の方々や子どもたちとの交流が自然発生的に生じてきていることは実感として得ています」

他方、地域への環境貢献としては、敷地内の緑化が市街地約200mの範囲に対してクールアイランド効果をもたらし、夏場でも、最大-3℃の冷却効果が見込まれているという。

2023年、現在工事中のセントラルフォレストⅡの完成により、「浄水の森」プロジェクトは完結する。だが、暮らしの場としての成熟はここからがスタートだ。「浄水の森」を構成する豊かな緑が地域のランドマークとなり、居住者のもとより、地域の人々の暮らしをも、豊かに彩っていくことを期待したい。



上●「フォレストゲートII」のラウンジ。住棟内からも豊かな緑が感じられる
右●「セントラルフォレストI」内のライブラリから「浄水の丘」を臨む



第33回「緑の環境プラン大賞」の受賞団体決定

一般財団法人第一生命財団は、この度、第33回「緑の環境プラン大賞」の受賞団体を決定しました。「緑の環境プラン大賞」は、全国から緑化プランを公募し、優れたプランを表彰するとともにその実現のために緑化工事助成を行うことで、緑豊かな環境の形成を図り、生活の質の向上やコミュニティの醸成等につなげるものです。全国から、シンボル・ガーデン部門8点、ポケット・ガーデン部門25点、計33点の応募があり、次の作品の受賞を決定しました。

シンボル・ガーデン部門

国土交通大臣賞	金剛沢緑地愛護協会	住民が憩う新しい里山「八木山テラス」の創生	宮城県仙台市
---------	-----------	-----------------------	--------

都市緑化機構賞	特定非営利活動法人 ^{アワード} awarart	北潟湖畔ガーデン体験と交流が生まれるクロスステラス	福井県あわら市
---------	-----------------------------------	---------------------------	---------

第一生命賞	札幌アイヌ協会	札幌イオルの森	北海道札幌市
-------	---------	---------	--------

ポケット・ガーデン部門

国土交通大臣賞	花咲き山	緑が育つ人が集まるみんなのガーデン「ららばーく」	千葉県市原市
---------	------	--------------------------	--------

第一生命財団賞	一般社団法人異才ネットワーク	自然やいのちと共生する不登校の子ども居場所づくり	滋賀県大津市
---------	----------------	--------------------------	--------

コミュニティ大賞	社会福祉法人想伝舎	食・農・遊び 五感を育む園庭作りプロジェクト	宮城県遠田郡美里町
----------	-----------	------------------------	-----------

群馬県立藤岡北高等学校環境土木科 ガーデニングコース	みんなの広場 いこいの社 ^{もろ}	群馬県藤岡市
-------------------------------	----------------------------	--------

群馬県立富岡実業高等学校草花部	富岡の歴史に触れる庭プロジェクト	群馬県富岡市
-----------------	------------------	--------

新潟県立島見緑地 聖籠緑地 指定管理者 株式会社日建緑地	みんなの花壇プロジェクト	新潟県北蒲原郡聖籠町
---------------------------------	--------------	------------

特定非営利活動法人備前プレーパークの会	どんぐりの森コミュニティガーデン	岡山県備前市
---------------------	------------------	--------

香川大学創造工学部環境デザイン工学領域	ウェルカム「レイン」ガーデン“ぼぼぼ”	香川県高松市
---------------------	---------------------	--------

社会福祉法人如水福祉会如水こども園	1年まいにちワクワクを見つけに行こう！	大分県中津市
-------------------	---------------------	--------

熊本県立熊本農業高等学校	季節を感じる熊農緑地 ～地域の拠点としての役割を発信する空間づくり～	熊本県熊本市
--------------	---------------------------------------	--------

緑の環境プラン大賞の詳細、緑の都市賞、屋上・壁面緑化技術コンクールの受賞作品等の詳細は以下のホームページをご覧ください。
公益財団法人都市緑化機構 <https://urbangreen.or.jp/grant/3hyosho>

噂の

「駅前」探検

第14回北千住駅

千住は、荒川と隅田川に囲まれた半径1kmの島状のエリア。旧街道、国道4号線、JRなどの鉄道が南北に並行するように縦断する。北千住駅はそのやや荒川寄りに位置し、現在は、JR常磐線、東京メトロ日比谷線と千代田線、東武スカイツリーライン、つくばエクスプレスが乗り入れ、都心と北関東をつなぐ交通の要衝となっている。二つの川の周縁部には、旧日光街道やかつての堤防、水路などがもとなった街路網が広がり、戦前から戦後にかけて発達した20近くの商店街が点在する。商店の多くは店舗付き住宅で、その背後は密集住宅地で小規模な町工場も存在する。バブル経済の時代地上げによる再開発の波は、幸いなことに千住地域までは及ばず、変貌を遂げた都心部とは対照的に、今でも旧街道や路地などの昭和の生活空間が息づいていて貴重な。

今尾恵介

いまお・けいすけ●1959年横浜市生まれ。フリーライター。旅行ガイドブック、地図・旅行関係の雑誌や地図・鉄道関係の書籍の執筆を精力的に手がける。(一財)日本地図センター客員研究員、(一財)地図情報センター評議員など。著書に『駅名学入門』(中央公論新社、2020)、『地図帳の深読み』(帝国書院、2019)、『不思議地名巡り』(ちくま文庫、2020)他多数。

イラストマップ:小夜小町

千住といえば、奥州・日光街道が江戸の日本橋を発って最初の宿場である。当然ながら参勤交代の長い行列もここを通った。ただし国元から大人数を歩かせるのは経費がかかるため、手っ取り早く家格に合った威厳を保持すべく現地でバイトを雇った話も聞く。千住でも行列エキストラ目当ての若者が多くたむろしていたらどうか。

千住宿は当時の荒川本流である隅田川を境に北側が足立郡で本宿と新宿、南側は豊島郡で南宿(小塚原町)に分かれていた。明治に入るとこれが千住北組と千住南組になる。川をはさんで南北で郡が異なるので、明治22(1889)年の町村制施行時にも南足立郡千住町、北豊島郡南千住町と自治体も別々で、現在では北側が足立区の千住各町、南側が荒川区南千住となっている。

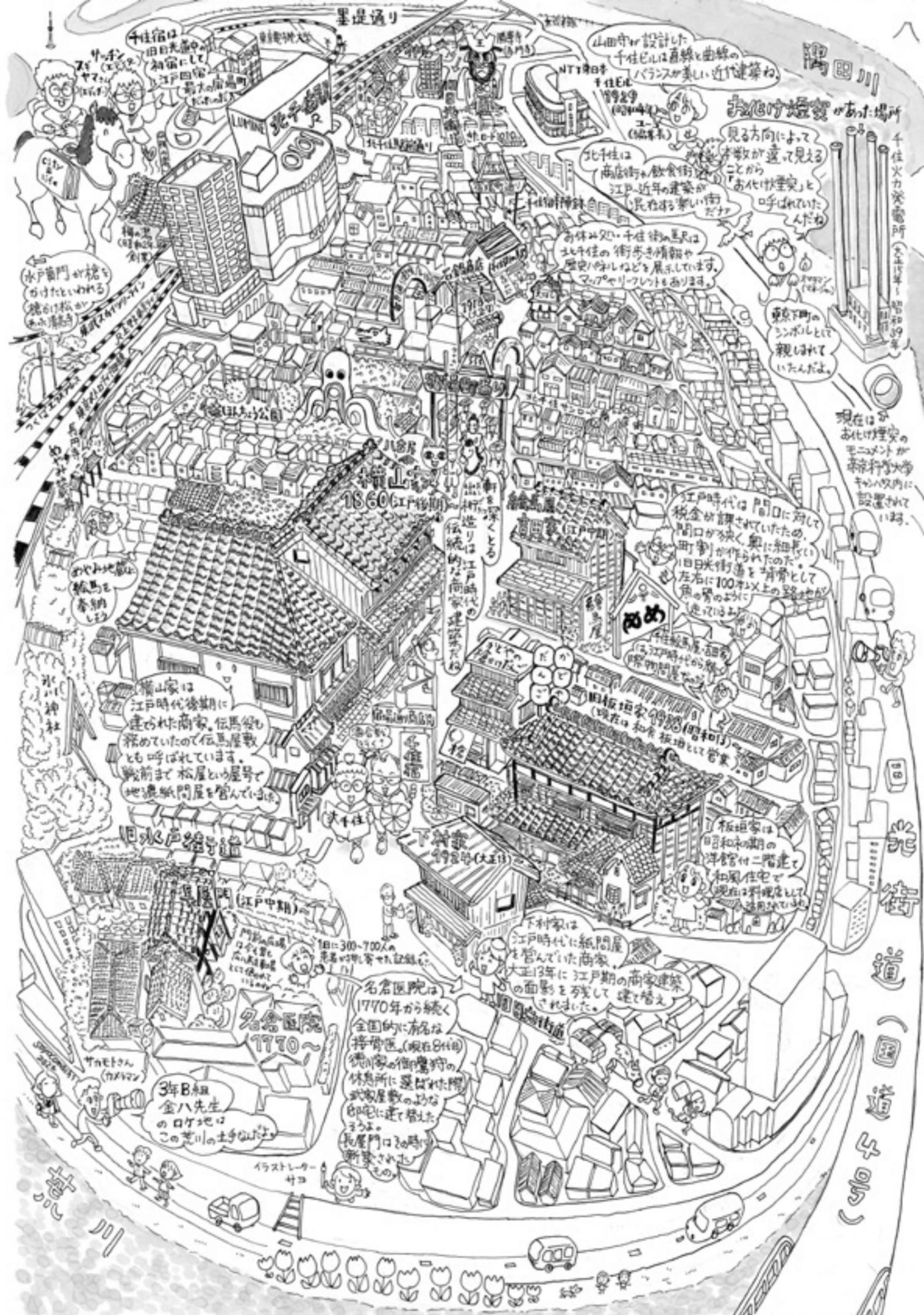
その両岸を結ぶ奥州街道の橋が、今

では国道4号が通る「千住大橋」である。この橋は普請奉行として有名な伊奈忠次が文禄3(1594)年に架設し、この街道を利用する伊達政宗が水腐れに強いイヌマキの巨材を調達したとされる。何度か架け替えられてはいるが、明治18(1885)年の洪水まで一度も流されなかったのはその材木選びの確かさと設計の勝利だろうか。現在の威厳ある鋼タイドアーチ橋は下り線専用で昭和2(1927)年、上り線の新しい橋は同48年に竣工したものである。

現在の北千住駅は首都圏の鉄道交通における北東側の要衝で、常磐線、東武鉄道、東京メトロ日比谷線、同千代田線、それにつくばエクスプレスの5線が連絡している。このうち最初に開業したのが常磐線だ。当時は私鉄の日本鉄道で、明治29(1896)年12月25日に田端～土浦間の開通に伴って北千住駅が開設された。同31年8月号の

時刻表『汽車汽船旅行案内』によれば1日わずか5往復、水戸までの所要時間は約4時間、平(現いわき)までは8時間もかかっている。今は上野～いわき間が2時間10分台だ。

北千住駅に明治32(1899)年8月27日に接続したのが東武鉄道である。繊維産業の発展が著しかった両毛地域(栃木県・群馬県)の物産の輸送を主目的に設立され、この年に北千住～久喜間24マイル63チェーン(39.9km)を開業した。もちろん蒸気機関車の牽引で、当初の途中駅は西新井、草加、越ヶ谷(現北越谷)、粕壁(現春日部)、杉戸(現東武動物公園)の5か所のみ。現在はこの間に22駅もある。同33年4月改正ダイヤによれば1日7往復、所要時間はおおむね1時間20分で運転されており、日本鉄道の7往復の列車にそれぞれ接続していた。東武が都心方面へ通じていなかったため当然の



配慮であろう。

東武が都心方面へ延伸したのは同35年、吾妻橋(現とうきょうスカイツリー)までの開業であるが、まだ路面電車は走っておらず、同37年には手前の曳舟から総武鉄道(現総武本線)の亀戸まで新線を建設して両国橋(現両国)まで同鉄道へ乗り入れ、都心に少し近くなった。吾妻橋に旅客列車が戻ってきたのは明治43(1910)年で、この年に東京市電が近くまで延伸され、隅田川西岸の「本物の浅草」や日本橋方面の都心への往来が便利になった。これを機に東武のターミナルも吾妻橋から「浅草」に改められている。

北千住にとって大きな変化となったのが荒川放水路の建設である。その契機となったのが明治43(1910)年の「関東大水害」で、荒川に新たな巨大な放水路を建設して下流部の流量を抜本的に増やす計画が立てられた。着工は大正2(1913)年で、途中で第一次世界大戦の資材不足と関東大震災を伴って同13年ようやく通水に漕ぎ着けている。放水路の建設にあたっては常磐線と東武鉄道の一部が敷地にかかったため、特に東武は大規模な線路変更を行っている。このうち北千住以北は大幅に北東側の現在線へ移設。関東大震災の2か月前に完成した。

震災では東武鉄道でも旧浅草駅周辺の火災で駅舎や本社、機関庫などを焼失する被害があり、架けられたばかりの荒川放水路の橋梁も橋脚の沈下と橋桁の移動があったため運休を強いられたが、それでも浅草～西新井間が復旧したのは震災発生から3週間後の9月22日と早かった。それ以上に浅草～北千住間を皮切りに複線化が次々と進み、線路が付け替えられた北千住～西

新井間を含む浅草～西新井間は大正13(1924)年に電化、同時にこの付け替え区間には小菅、五反野、梅島の3駅が開業、沿線の利便性は大幅に向上した。常磐線も大正2(1913)年までに我孫子までの複線化を完成させている。ただし電化は昭和11年(日暮里～松戸間)と遅れたが。

大正期の東京市郊外の人口急増はめざましく、道路や学校などのインフラの整備が追いつかない間に田畑は急速に宅地化していった。南足立郡千住町の人口も大正9(1920)年の3.1万人から10年後の昭和5(1930)年には6.9万人と2.2倍、特に東武の複線電化と新駅設置の恩恵を受けた梅島村(昭和3年に町制施行)ではこの間に3,879人から12,748人と3.3倍の伸びを示している。

次に接続する新たな鉄道は戦後の地下鉄だ。昭和36(1961)年に南千住～仲御徒町間を開業した当時の営団地下鉄日比谷線が翌37年に北千住まで延伸、同時に開業した人形町までの区間で東武伊勢崎線との相互直通運転を始めている。当時は高度成長期に入ったばかりで沿線の人口急増が著しく、たとえば埼玉県草加市は昭和35(1960)年の38,533人が10年後の同45年に123,269人と3.2倍に急増、越谷市も49,460人から190,079人と3.8倍に増えた。昭和49(1974)年には東武伊勢崎線の北千住～竹の塚間が複々線化されているが、これは関東の私鉄では初である。関西では京阪電気鉄道がすでに昭和8(1933)年に一部区間の複々線化を完成させていたから、東京の人口規模から考えると出遅れ感はない。

常磐線沿線も人口が急増しており、

営団地下鉄千代田線が昭和44(1969)年に北千住～大手町間を開業した。これにより都心への地下鉄ルートが2本となって混雑緩和に威力を発揮している。同46年には北千住～綾瀬間が開業、常磐線との相互直通運転を開始、この年に常磐線綾瀬～我孫子間の複々線化も完成、千代田線～常磐線各駅停車は事業主体を別としながら「1つの系統」として機能するようになった。

そして最後の登場が「つくばエクスプレス」(首都圏新都市鉄道)である。日本最高レベルとなった常磐線の混雑緩和と筑波研究学園都市の足として「常磐新線」の名で昭和50年代から計画されてきたが、実現したのはだいぶ遅れて平成17(2005)年となった。秋葉原～つくば間の全長58.3kmで、道路とはすべて立体交差のため最高時速130kmで運転している。北千住駅から先は、地上に出たばかりの千代田線、常磐線と並んで荒川を渡る。さらに下流側には東武伊勢崎線(スカイツリーライン)の複々線が併走しており、5つのトラス橋に合計10線が並んで荒川を渡る姿は壮観だ。

<出典>

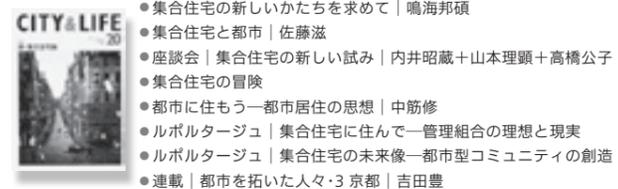
- 千住大橋の概要:『角川日本地名大辞典』
- 北千住～久喜間の距離:『私鉄史ハンドブック』
- 東武明治33年4月改正ダイヤ:『鉄道航路旅行案内』明治33年9月号
- 関東大震災の被害と復旧:中央防災会議災害教訓の継承に関する専門調査会 第3節 鉄道と電力の復旧 https://www.bousai.go.jp/kyoiku/kyokun/kyoukunnokeishou/rep/1923_kanto_daishinsai_2/pdf/6_chap1-3.pdf
- 南足立郡各町の人口:『大東京市概観』東京市役所、昭和7年発行、p.108
- 草加市の人口推移:「草加市人口ビジョン」2016年3月、p.3



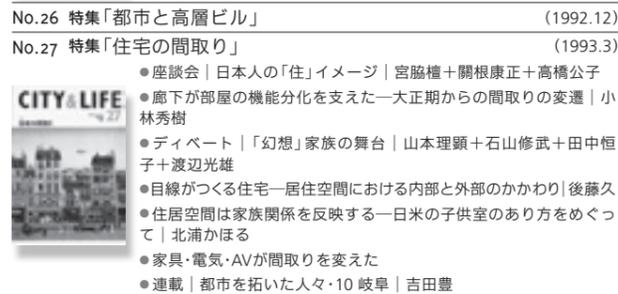
毎日通り飲食店街 photo:坂本政十賜

今号と関連する特集号をPick Up
(その他は特集タイトルのみ)

No.1	特集「都市の幹線道路」	(1984.2)	在庫切れ
No.2	特集「都市公園」	(1984.5)	在庫切れ
No.3	特集「都市と河川」	(1984.12)	
No.4	特集「子どものための都市計画」	(1985.6)	在庫切れ
No.5	特集「都市と盛り場」	(1985.12)	
No.6	特集「都市生活と神社仏閣」	(1986.5)	
No.7	特集「住宅地の道路と家並み」	(1986.9)	
No.8	特集「都市とヒューマンスケール」	(1987.3)	
No.9	特集「都市と水辺」	(1987.7)	在庫切れ
No.10	特集「都市の景観」	(1987.12)	在庫切れ
No.11	特集「都市と防火」	(1988.7)	在庫切れ
No.12	特集「都市とアメニティ」	(1988.12)	在庫切れ
No.13	特集「都市と運河」	(1989.8)	
No.14	特集「都市再開発とアーバンデザイン」	(1989.12)	
No.15	特集「アミューズメントと都市」	(1990.3)	
No.16	特集「高齢化社会と都市」	(1990.6)	在庫切れ
No.17	特集「私鉄と歩んだ都市」	(1990.9)	
No.18	特集「都市とホール」	(1990.12)	
No.19	特集「エコロジー都市」	(1991.3)	
No.20	特集「新・集合住宅論」	(1991.6)	



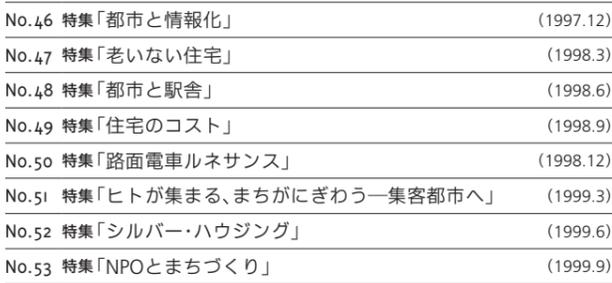
- 集合住宅の新しいかたちを求めて | 鳴海邦碩
 - 集合住宅と都市 | 佐藤滋
 - 座談会 | 集合住宅の新しい試み | 内井昭蔵+山本理顕+高橋公子
 - 集合住宅の冒険
 - 都市に住もうー都市居住の思想 | 中筋修
 - ルポルタージュ | 集合住宅に住んでー管理組合の理想と現実
 - ルポルタージュ | 集合住宅の未来像ー都市型コミュニティの創造
 - 連載 | 都市を拓いた人々・3 京都 | 吉田豊
- | | | | |
|-------|---------------|-----------|--|
| No.21 | 特集「新・リゾート論」 | (1991.9) | |
| No.22 | 特集「都市と商業空間」 | (1991.12) | |
| No.23 | 特集「都市の民俗誌」 | (1992.3) | |
| No.24 | 特集「都市と緑化」 | (1992.6) | |
| No.25 | 特集「公共建築のデザイン」 | (1992.9) | |



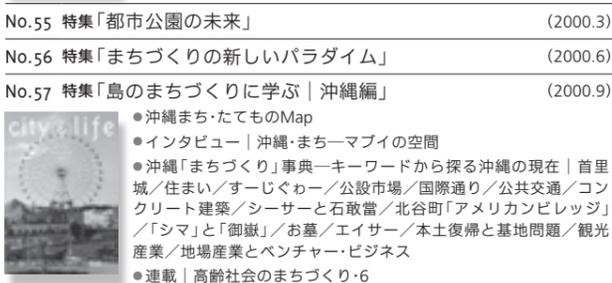
- 府県庁舎のデザインの変遷 | 石田潤一郎
 - 座談会 | デザイン時代の公共建築 | 磯田柱史+長谷川逸子+柏木博
 - 公共空間における屋外彫刻 | 石川健次
 - ルポ | 地方公共団体の庁舎デザインを巡って
 - 公共建築の試み | 川端直志
 - 市民の領域ー公共性の誕生と変遷 | 若林幹夫
 - 連載 | 都市を拓いた人々・8 那覇 | 吉田豊
- | | | | |
|-------|-------------|-----------|--|
| No.26 | 特集「都市と高層ビル」 | (1992.12) | |
| No.27 | 特集「住宅の間取り」 | (1993.3) | |

- 座談会 | 日本人の「住」イメージ | 宮脇檀+關根康正+高橋公子
- 廊下が部屋機能分化を支えたー大正期からの間取りの変遷 | 小林秀樹
- ディベート | 「幻想」家族の舞台 | 山本理顕+石山修武+田中恒子+渡辺光雄
- 目線がつくる住宅ー居住空間における内部と外部のかかわり | 後藤久
- 住居空間は家族関係を反映するー一日米の子供室のあり方をめぐって | 北浦かほる
- 家具・電気・AVが間取りを変えた
- 連載 | 都市を拓いた人々・10 岐阜 | 吉田豊

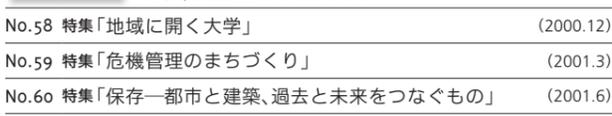
No.28	特集「都市と広告」	(1993.6)	
No.29	特集「都市の上水道」	(1993.9)	
No.30	特集「都市の保存」	(1993.12)	
No.31	特集「ミュージアムと都市」	(1994.3)	
No.32	特集「プレハブ住宅」	(1994.6)	
No.33	特集「都市の色彩」	(1994.9)	
No.34	特集「観光都市の条件」	(1994.12)	
No.35	特集「都市と下水道」	(1995.3)	
No.36	特集「マンションのメンテナンス」	(1995.6)	
No.37	特集「都市と歩道空間」	(1995.9)	
No.38	特集「ゴミとリサイクル」	(1995.12)	
No.39	特集「住宅の水まわり」	(1996.3)	
No.40	特集「都市の駐車空間」	(1996.6)	
No.41	特集「橋のデザイン」	(1996.9)	
No.42	特集「建築と木材」	(1996.12)	
No.43	特集「輸入住宅」	(1997.3)	
No.44	特集「都市と学校」	(1997.6)	
No.45	特集「環境共生型まちづくり」	(1997.9)	



- インタビュー | ゼロエミッションからのまちづくり | グンター・パウリ
 - 地域・生活・産業のエコロジカルな再生ードイツ・IBAエムシャーパーク・プロジェクトの挑戦
 - ルポ | エコロジカル・ハウジングの実験ー環境共生住宅地を訪ねて | 世田谷区深沢環境共生住宅 / NEXT21 / マテール穴生 / 山口朝田ヒルズ
 - インタビュー構成 | 都市にピオトープを | 杉山恵一
 - 共生のための技術を求めてー環境エンジニアリングの未来
 - 連載 | 戦後都市論の系譜学・5 | なつめひろみ
- | | | | |
|-------|--------------------------|-----------|--|
| No.46 | 特集「都市と情報化」 | (1997.12) | |
| No.47 | 特集「老いない住宅」 | (1998.3) | |
| No.48 | 特集「都市と駅舎」 | (1998.6) | |
| No.49 | 特集「住宅のコスト」 | (1998.9) | |
| No.50 | 特集「路面電車ルネサンス」 | (1998.12) | |
| No.51 | 特集「ヒトが集まる、まちがにぎわうー集客都市へ」 | (1999.3) | |
| No.52 | 特集「シルバー・ハウジング」 | (1999.6) | |
| No.53 | 特集「NPOとまちづくり」 | (1999.9) | |
| No.54 | 特集「地域のノード、公共施設の新潮流」 | (1999.12) | |

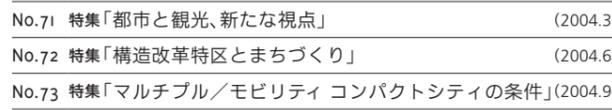


- 座談会 | 都市と公共性ー公共空間が秘める都市再生の可能性 | 長谷川逸子+竹村真一+若林幹夫
 - 今、公共施設に何が求められているか
 - ケーススタディ | ノードとしての公共施設
 - まちづくりと公共施設
 - 連載 | 高齢社会のまちづくり・3
 - 連載 | 都市を拓いた人々・32 川越
- | | | | |
|-------|----------------------|----------|--|
| No.55 | 特集「都市公園の未来」 | (2000.3) | |
| No.56 | 特集「まちづくりの新しいパラダイム」 | (2000.6) | |
| No.57 | 特集「島のまちづくりに学ぶ 沖縄編」 | (2000.9) | |



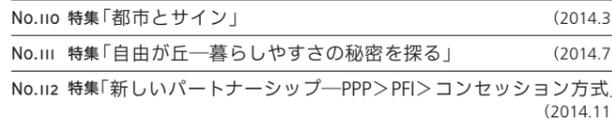
- 沖縄まち・たてものMap
 - インタビュー | 沖縄・まちーマブイの空間
 - 沖縄「まちづくり」事典ーキーワードから探る沖縄の現在 | 首里城 / 住まい / すーじくわー / 公設市場 / 国際通り / 公共交通 / コンクリート建築 / シーサーと石敢當 / 北谷町「アメリカンビレッジ」 / 「シマ」と「御嶽」 / お墓 / エイサー / 本土復帰と基地問題 / 観光産業 / 地場産業とベンチャー・ビジネス
 - 連載 | 高齢社会のまちづくり・6
- | | | | |
|-------|--------------------------|-----------|--|
| No.58 | 特集「地域に開く大学」 | (2000.12) | |
| No.59 | 特集「危機管理のまちづくり」 | (2001.3) | |
| No.60 | 特集「保存ー都市と建築、過去と未来をつなぐもの」 | (2001.6) | |

No.61	特集「30代建築家の都市イメージ」	(2001.9)	
No.62	特集「使う建築、使うまちー都市のストック活用法 国内編」	(2001.12)	
No.63	特集「LETS的まちづくり」	(2002.3)	
No.64	特集「『都心居住』のまちづくり」	(2002.6)	
No.65	特集「都市はアートで刺激される」	(2002.9)	
No.66	特集「ランドスケープ・デザインの新展開ー地形を活かしたまちづくり」	(2002.12)	
No.67	特集「スローライフとまちづくり」	(2003.3)	
No.68	特集「サステナブルな都市“成長”政策ー都市計画と長期ビジョン」	(2003.6)	
No.69	特集「吉祥寺ー住みたい町ナンバー1の理由」	(2003.9)	
No.70	特集「緑の建物づくり」	(2003.12)	



- 座談会 | 町と建物は「緑」でつながる | 石井修+宮城俊作+山田宏之
 - Let's Greeningー「緑」で生まれ変わる建物
 - ケーススタディ | 育つ建物、育つ都市
 - ルポ | 森を取り込む商業施設
 - インタビュー | 世田谷の「森」に暮らすー「コミュニティ・ベネフィット」でつくる豊かな環境とは | 甲斐徹郎
 - 連載 | 都市を拓いた人々・41 下関
- | | | | |
|-------|--|-------------|------|
| No.71 | 特集「都市と観光、新たな視点」 | (2004.3) | |
| No.72 | 特集「構造改革特区とまちづくり」 | (2004.6) | |
| No.73 | 特集「マルチプル / モビリティ コンパクトシティの条件」 | (2004.9) | |
| No.74 | 特集「都市の言説を巡る旅 10のキーワードから探る都市[論]の現在」 | (2004.12) | |
| No.75 | 特集「マルチモーダルが都市を楽しくする [ヨーロッパ編]」 | (2005.3) | |
| No.76 | 特集「路地・横丁空間からの都市再生」 | (2005.6) | |
| No.77 | 特集「公共空間、新たな視点」 | (2005.9) | |
| No.78 | 特集「小さな町の豊かな暮らし」 | (2005.12) | |
| No.79 | 特集「都市の「良質な」居住環境」 | (2006.3) | |
| No.80 | 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ①」 | (2006.6) | |
| No.81 | 特集「安全・安心のまちづくり」を考える」 | (2006.9) | |
| No.82 | 特集「エリア・スタディ・シリーズ 「ロハス」時代の、「素顔のまま」でまちづくり」 | (2006.12) | |
| No.83 | 特集「ジェイン・ジェイコブスの宿題」 | (2007.3) 重版 | |
| No.84 | 特集「サイクリング・シティの可能性」 | (2007.6) | |
| No.85 | 特集「地図とまちー見る・歩く・つくる」 | (2007.9) | |
| No.86 | 特集「エリア・スタディ・シリーズ わが町流まちづくりのすすめ②」 | (2007.12) | |
| No.87 | 特集「「美味し国」の景観論ーフランス、都市景観の新たな創造」 | (2008.3) | |
| No.88 | 特集「美味しいまちづくり」 | (2008.6) | |
| No.89 | 特集「都市を愉しむいくつかの方法」 | (2008.9) | |
| No.90 | 特集「シュリンキング・シティー縮小する都市の新たなイメージ」 | (2008.12) | |
| No.91 | 特集「都市彩譜ーまちのいろどりのふ」 | (2009.3) | |
| No.92 | 特集「fun townーたのしい・かわいい・やさしいまちづくり」 | (2009.6) | |
| No.93 | 特集「マチとムラの幸福のレシピ」 | (2009.9) | |
| No.94 | 特集「創造のまちづくり」 | (2009.12) | |
| No.95 | 特集「団地ルネサンス」 | (2010.3) | |
| No.96 | 特集「風と土のインダストリー 地場産業の未来」 | (2010.6) | |
| No.97 | 特集「新しい公共交通ー生活支援ネットワークへー」 | (2010.9) | |
| No.98 | 特集「下北沢から「都市」を考える」 | (2010.12) | 在庫切れ |

No.99	特集「「学校」からのまちづくり」	(2011.3)	
No.100	特集「21世紀のまちづくり「情報革命が、都市をどう変えようとしているのか」	(2011.6)	
No.101	特集「震災後の地域・コミュニティ・住まいー再生・復興への視点」	(2011.9)	
No.102	特集「交流住宅ー新しい暮らしのかたち」	(2011.12)	
No.103	特集「時間に暮らす」	(2012.3)	
No.104	特集「エリア・スタディ・シリーズ 地産地消エネルギーのまちづくり」	(2012.6)	
No.105	特集「「町おこし」新潮流ー地域に埋もれたコンテンツを発信する」	(2012.9)	
No.106	特集「子どもの空間とまちづくり」	(2012.12)	在庫切れ
No.107	特集「シティホールー市庁舎の新潮流」	(2013.3)	
No.108	特集「都市の〈隙間〉に集い、憩い、賑わう」	(2013.7)	
No.109	特集「瀬戸内文化の再生 爺さま、婆さまを元気にする芸術祭」	(2013.11)	
No.110	特集「都市とサイン」	(2014.3)	
No.111	特集「自由が丘ー暮らしやすさの秘密を探る」	(2014.7)	
No.112	特集「新しいパートナーシップーPPP>PFI> コンセプション方式」	(2014.11)	
No.113	特集「新しい図書館」	(2015.3)	
No.114	特集「空き家一家と暮らしと地域のこれから」	(2015.7)	
No.115	特集「酒とまちづくり」	(2015.11)	
No.116	特集「ロスト近代と都市の未来」	(2016.3)	
No.117	特集「建築とまちづくり」	(2016.7)	
No.118	特集「空き地カルチャー 多孔隙都市の可能性」	(2016.11)	
No.119	特集「〈ゲストハウス〉的まちづくり」	(2017.3)	
No.120	特集「ライフスタイルとしての「防災」」	(2017.8)	
No.121	特集「夕方からのまちづくり」	(2017.12)	
No.122	特集「これからの住まい・くらしーやわらかい都市へ」	(2018.4)	
No.123	特集「みんなできつくり、みんなでつかう」	(2018.8)	
No.124	特集「生まれ変わる街ー渋谷・新宿・池袋」	(2018.12)	
No.125	特集「オープンスペースからのまちづくり」	(2019.4)	
No.126	特集「都市と木材」	(2019.8)	
No.127	特集「カフェとまちづくりー心地よい空間と街並み」	(2019.12)	
No.128	特集「クラウドファンディングで町を楽しく魅力的に」	(2020.4)	
No.129	特集「都市の言説を巡る旅ー8のキーワードから探る都市[論]の現在2020」	(2020.8)	
No.130	特集「コロナ後の都市と暮らし」	(2020.12)	
No.131	特集「〈SDGs〉を考えるーサステナブルな都市とは」	(2021.4)	
No.132	特集「まちとつながる〈エアブックレット〉」	(2021.8)	
No.133	特集「エリア・スタディ・シリーズ 〈エリア・スタディ・シリーズ〉その後」	(2021.12)	
No.134	特集「〈SDGs〉を考えるーサステナブルな都市とはー[実践編]」	(2022.4)	
No.135	特集「「ほどほど都市」を実現するために」	(2022.8)	



- インタビュー | 「ほどほど都市」への期待ーイタリア「テリトリーオ」を参考に | 陣内秀信
- 対談-1 | 「地域資本主義」の可能性 | 平川克美×柳澤大輔
- 対談-2 | 「ほどほど都市」と適正規模 | 町村敬志×谷口守
- 対談-3 | 「ほどほど都市」の核としてのコミュニティとコモンズ | 北山恒×広井良典
- グラビア | 「ほどほど都市」の風景 | 坂本政十賜
- 連載 | 都市の緑3表彰ー緑がつなく町・人・暮らし・1 | 「SAKURA MACHI Kumamoto」
- 連載 | 噂の「駅前」探検・13 | 御茶ノ水駅 | 今尾恵介・小夜小町・坂本政十賜

待機児童対策・保育所等助成事業 第10回(2022年度)助成施設のお知らせ

この度、第10回の助成施設を決定しましたので、お知らせします。待機児童数が多い地域において、開園して間もない保育園および認定こども園から、128件の応募をいただきました。厳正なる選考の結果、下表のとおり44件、助成総額3000万円(申請額)の助成を決定しました。

地域	施設名称	購入希望品(抜粋)
都道府県	市区町村	
岩手県	盛岡市	幼保連携型認定こども園 盛岡大学附属幼稚園
		すべり台、アウトドアプレイハウス、ピクニックガーデンハウス、テーブル、フェンス
宮城県	仙台市	ぶらざ保育園長町
(6)		絵本・紙芝居セット
		バスドラムセット、オルガン、トーンチャイム、和太鼓他
		KIDSーKan
		ウェイバランス平均台、バランスストーン、カラーマット、ソフトクッション
		第2紫山いちにいさん保育園
		プール、わくわく水流セット、水遊びセット、砂場セット、ミニタプ
		認定こども園ろりぼっぼ保育園
		ハイハイクライマースロープ式
	名取市	閑上わかばこども園
		ボルダリング
福島県	須賀川市	双葉こどもの園
		汁椀、深皿、小皿、マグカップ
茨城県	鹿嶋市	実りの木保育園
		紙芝居セット、マット、安全柵、自立式扉、Hテーブル他
栃木県	佐野市	さのぶどうの樹保育園
(2)		砂場屋根一式
	小山市	駅東さくら保育園
		はいはいスケルトンネル、ラッコのあんよクッションマット
群馬県	太田市	アプリコット保育園
		ケアリングハウス(木製)
埼玉県	さいたま市	さつき保育園
(2)		マット、平均台、トンネル、跳び箱、トランポリン、鉄棒他
		第二浦和たいよう保育園
		平均台、跳び箱、すべり台、鉄棒、のりものアスレチック、サッカーゴール、ボール、マット
千葉県	松戸市	プチリック北小金園第三
(2)		タイニートットビックコーナーキット、リトルトンネルキット
	習志野市	クニナ奏の杜保育園
		歩行セット、アスレチックセット、平均台、鉄棒、パズル、ボール、ボールプール、知育玩具他
東京都	世田谷区	ten kids 玉川台園
(6)		絵本スタンド、絵本
	荒川区	聖華ひなた保育園
		巧技台、跳び箱、鉄棒、体操マット、パラバルーン、マウンテンボール他
	葛飾区	無二保育園
		巧技台セット
	江戸川区	かさい発みらい行きほいくえん
		巧技台、砂場ユニット
	西東京市	西東京ユーカリ保育園
		巧技台、滑り台、鉄棒、踏切板、跳び箱
	多摩市	おだ学園保育園
		積み木、キルディブロック、ソフトエッジ箱積み木他
神奈川県	横須賀市	横須賀市立中央こども園
		ドリームログ、ワゴン、パーテーション
新潟県	新潟市	白根カトリックこども園
		ロッカー、テーブル、椅子、乳児用調理台、パズル、ままごとキッチン、ブロック他
石川県	かほく市	宇ノ気学園にじの丘こども園
		マーチングドラム、マーチングトリオ、マーチングキーボード、シンバル他
福井県	福井市	なのはなこども園
(3)		ワイヤレスアンプ、チューナユニット、シーソー、多目的ひな段、巧技台、跳び箱、スライドテント
		認定こども園ひばり
		元気っ子ジム、鉄棒、ハードル、ままごと、ブロック、積み木、パーテーション、椅子他
		森田さくらこども園
		バランスランド、鉄棒、玉入れ台、紅白ボール、メッシュトンネル、キッズマット他
愛知県	名古屋市	御田クローバーこども園
		長胴太鼓一式、平太鼓一式
三重県	桑名市	らいむの丘保育園
(2)		ゲームボックスアクティブセット、ジャンピングマット、レインボートンネル他
	三重郡菰野町	たいりん保育園
		ブレイククッション、クライミングロープ、クッションブロック、マット
大阪府	高槻市	はぐみこども園
(3)		手洗い場設置工事一式
	堺市	ベガサス福泉中央こども園
		色板、どうぶつパズル、ブロック、対面子どもキッチン、ままごとセット他
		うり坊保育園
		組み替えステップ、マット、平均台、ボール、菜園活動用シヨベル他
兵庫県	明石市	明石さくらんぼこども園
		水耕栽培ユニット
和歌山県	岩出市	きらきら保育園 岩出園
		お散歩車、お散歩カート、くるりんマットランド、キルディブロック
岡山県	倉敷市	西田認定こども園
(3)		収納つき絵本たて、絵本セット、図鑑セット
		すみくら倉敷みなみ保育園
		おでかけぐるま、外カバー
	浅口市	浅口はちまん小規模保育園
		玩具殺菌乾燥保管庫
徳島県	板野郡藍住町	あいあい保育園
		アクティブ鉄棒セット、カラフルチェアセット、三輪車
香川県	高松市	らく楽寺井保育園
		フリーラック、整理棚、ままごとテーブル、だっこ人形、鉄道あそびセット、ブロック、絵本他
福岡県	糟屋郡宇美町	柳原ぶらす保育園
		キーボード、ドラムセット、ビブラフォン、マラカス、バスドラム、ボンゴ、シンバル、ハンドベル他
大分県	大分市	大道にじいろ保育園
		プレイロック、鉄棒、マット
沖縄県	うるま市	わくわくほいくえん
		跳び箱、踏切板、カラーマット、収納ワゴン、平均台、鉄棒、スキップバイク

第一生命財団について

第一生命財団は、第一生命保険相互会社(現第一生命保険株式会社)からの拠出金をもとに設立された都市のしくみとくらし研究所、地域社会研究所および姿勢研究所が、2013年4月1日付で合併し発足した一般財団法人です。

当財団は、豊かな次世代社会の創造に寄与することを目的として、少子高齢化社会において、健康で住みやすい社会の実現に向けた調査研究ならびに提案、助成等を行っています。具体的には、これまで取り組んできた「都市とくらし」「コミュニティ」「姿勢と健康」に関する調査研究と啓発活動に加え、社会的に喫緊の課題である「待機児童対策」の一助となるべく、新設の保育所(認定こども園を含む)に対する助成事業および緑豊かな住環境の整備のための都市緑化に関わる助成事業「都市の緑3表彰」に取り組んでいます。

●ホームページ <http://group.dai-ichi-life.co.jp/dai-ichi-life-foundation/>

購読のご案内

年3回(4月・8月・12月)発行、頒価500円+送料実費

定期購読は諸般の事情により受付を終了しました。毎号内容(PDF)をホームページに掲載いたしますので、そちらをご覧ください、ご希望の号をお求め願います。

information

city@life no.136 Dec.-Mar.2022-2023

2022年12月発行

企画委員	日端康雄(慶應義塾大学名誉教授) 陣内秀信(法政大学特任教授) 大村謙二郎(筑波大学名誉教授) 小泉秀樹(東京大学教授) 木下庸子(工学院大学教授・設計組織ADH代表) 盛田里香(第一生命財団常務理事) 佐藤真(株式会社アルシーヴ社)
編集・発行	一般財団法人 第一生命財団 東京都千代田区平河町1丁目2番10号平河町第一生命ビル2階 電話03-3239-2312
編集協力	株式会社アルシーヴ社 斎藤夕子 杉山 衛
デザイン・レイアウト	生沼伸子
印刷	株式会社エイチケイグラフィックス 頒価500円+送料実費

